

関東型式宝篋印塔の研究

齋 木 勝

目 次

I. はじめに	357
II. 研究史	358
III. 各時代の宝篋印塔	362
1. 鎌倉時代の宝篋印塔	362
2. 南北朝時代の宝篋印塔	368
3. 室町時代の宝篋印塔	377
4. 無銘の宝篋印塔	382
IV. 考 察	388
1. 分 布	388
2. 造立数の変遷	389
3. 各時代の様式的変遷	390
4. 計測値よりみた時代的特徴	392
V. おわりに	394



1. 箱根山塔 (永仁四年)



2. 余見塔 (嘉元二年)



3. 円光寺塔 (嘉元)



5. 安養院塔 (徳治三季)



4. 大見寺塔 (徳治三年)



7. 仏岩塔 (應長第一之暦)



13. 善光寺塔 (元亨二年)



14. 光福寺塔 (元亨癸亥)



18. 興福院塔 (元徳四年)



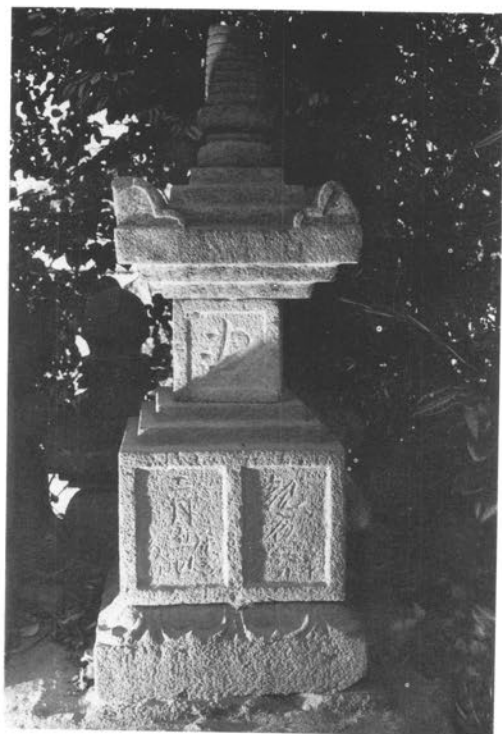
28. 鶴足寺塔 (康永四年)



30. 徳性寺塔 (貞和元歳)



31. 塩沢寺塔 (貞和六季)



32. 達摩堂塔（観応二年）



33. 棲雲寺開山塔（観応震）



35. 棲雲寺普同塔（文和癸巳歳）



34. 上行寺塔（図圓全歳）



38. 泣き塔 (文和五年)



41.42. 京徳観音塔 (延文六年)



46. 須賀神社塔 (貞治五年)



48. 実相院塔 (貞治六年)



50. 東光寺塔（應安己酉）



52. 達摩堂塔（應安第三）



54. 平親王山塔（應安第五）



55. 網子塔（永和二年）



70. 浄妙寺塔 (明徳三季)



78. 由比ヶ浜塔 (明徳第四)



108. 宝勝寺塔 (應永八年)



114. 国済寺塔 (應永十一年)



117. 北野神社塔 (応永十二稔)



122. 清澄寺塔 (應永十四年)



175. 自性院塔 (永享七命)



192. 長林寺塔 (文明6年)



198. 大見寺塔 (天文廿一年)



200. 正竜寺塔 (天文四年)



208. 正竜寺塔 (永禄五年)



210. 芳林寺塔 (永禄十一年)



1. 宝篋山塔



2. 清厳寺塔 (右塔)



3. 清厳寺塔 (左塔)



4. 冷泉為相塔



1. 普賢寺塔 (中央塔)



2. 願成寺塔



3. 安楽寺塔



4. 恵日寺塔

I. はじめに

宝篋印塔は石造仏塔の一形態である。

一般的には下部より反花座・基礎・塔身・笠・相輪の五材から成り、笠を上下とも段形状に作り、軒の四隅に特異な形態の隅飾をたてている。宝篋印塔は中世に隆盛を誇った石塔であり、五輪塔が曲線の表現による石塔であるのに比べ、直線の表現による石塔であるということが言えるのではないであろうか。

宝篋印塔に関する仏説については、筆者にはまだまだわからないことなので、先学の説をまずあげてみたい。

川勝政太郎（『石造美術』1944）

「寶篋印陀羅尼經は、詳しくは一切如来心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經と稱し、この經を安置する塔は、三世一切の諸佛の全身舍利を奉藏するものであると説かれてゐるので、この經の心呪を納めた金塗塔の形に倣ひ、手法を簡略化して寶篋印塔形なる特殊な塔婆が出現した。」
跡部直治（「宝篋印塔」仏教考古学講座、第2巻 塔婆編、1970）

「寶篋印塔と云うのは、唐の大興善寺沙門不空三蔵の翻譯にかかる一切如来心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經の所説にもとづき、同經の陀羅尼法要即ち梵語の呪文を書写して納めた一種の經塔から出た名目である。」

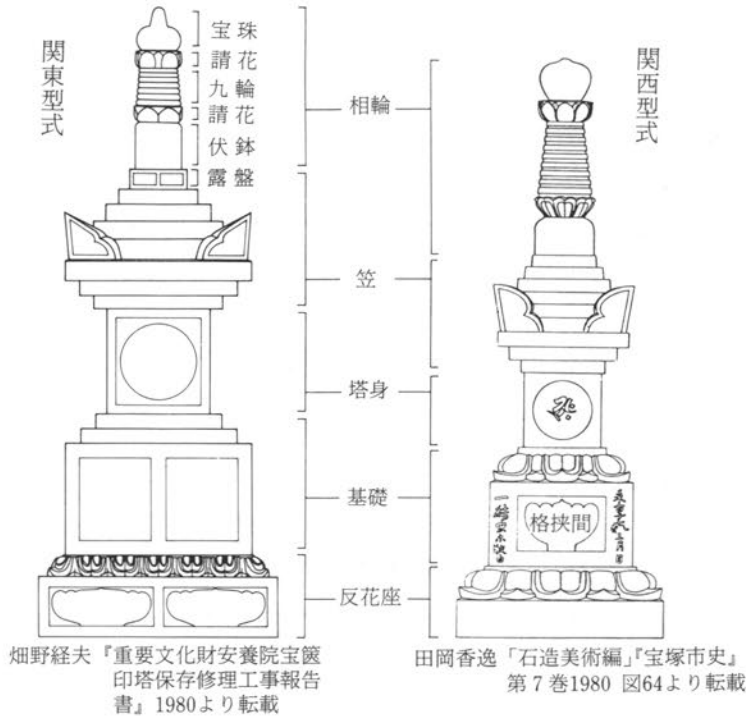
田岡香逸（『近江の石造美術』（3）1976）

「宝篋印塔の祖形は中国後周の吳越王錢弘俶が顯徳二年（955）に阿育王の故事に習い、八万四千基の金銅小塔を造り、宝篋印陀羅尼經を納めて頒布したもの—中略—この式の塔形を宝篋印塔と名づけたのは、祖形の金属塔が宝篋印陀羅尼經の容器であったからであろう。」

石塔の起りは塔婆であり、もともと釈迦如来の舍利を納める場所であったが、舍利のかわりに宝篋印陀羅尼經の經卷を塔に納めるようになったため、その塔形を宝篋印塔と呼ぶようになったということである。

本稿は関東地方の宝篋印塔について、その各部様式を時代的に捉え、関東型式宝篋印塔の特徴を追求しようとするものである。そこでまず関東型式宝篋印塔とはどのような型式かということ、関西型式宝篋印塔との比較において、概観してみたい。

第1図の左塔が関東型式、同右塔が関西型式である。反花座をみると関東型式では側面を輪郭にて二区に分ち、内部は素面、あるいは格狭間を入れる。基礎は反花座同様輪郭にて二区に分ち銘文を刻む。上画は二段の段形が一般的で、反花は刻まない。塔身はまた同じく輪郭を巻き、内面には四方仏の種子を刻む。笠は軒の下が二段、上が五段あるいは七段が一般的で、最上の段形を輪郭にて二区に分ち露盤としている。隅飾も輪郭を巻き二弧である。相輪は請



第1図 宝篋印塔各部名称及び関東型式・関西型式

花を単弁に刻出する。

関東・関西両型式の大きな差異は塔形よりみると、反花座のあり方であろう。関西型式は上面に反花を刻出するが側面素面の簡略なものであるのに比べ、関東型式は輪郭や格挟間などで重厚さをもたせる。したがって、関西型式では基礎が石塔の基礎として重要な部分を占めるのに比べ、関東型式では反花座が石塔の中で重要な部分を占める。

その他、関東型式は反花座、基礎側面、塔身、露盤に輪郭を施したり、基礎上面の段形により直線としての表現が多いのに比べ、関西型式は外郭が直線表現であり、関東型式とはやや異なるものを感じる。

II. 研究史

宝篋印塔を研究する学域となると、どの分野であろうか。歴史学、民俗学、仏教史学、あるいは考古学、文献などをあたってみると、どの分野にも微かながらはある。しかし、研究が進められている分野は、いわゆる石造美術と呼ばれる研究域である。

石造美術の研究が着手されたのは江戸時代に入ってからであるが、内容的には金石文研究のひとつとして銘文を主体とする研究であった。

その後、絵画の専門家が宝篋印塔をとりあげたり、美術史学の研究対象となることもあった。石造美術を学問的に体系化したのは、川勝政太郎であった(川勝1939a)。一方、坪井良平により歴史考古学の対象としても研究されるようになった(坪井1939)。それまでの感覚的な比較研究に実測、拓本等取り入れた実証的な研究手法が採られるようになったのである。

近年は、中世は言うに及ばず近世の宝篋印塔も研究され塔下の墓室の発掘調査も考古学的調査方法で実施されるようになった(鈴木他1983)。

ここでは、関東型式宝篋印塔に係る文献についてふれ、他に関しては次回に譲ることとした。内容的に断片的にならざるを得ない点を最初にお断わりしたい。

昭和の初期、跡部直治(跡部1928a、b、c)、赤星直忠(赤星1937)により鎌倉の宝篋印塔が報告された。赤星は宝篋印塔が南北朝時代後半から急に増え、室町時代前期に最も盛んになり、永享頃から急減することを指摘した。また、紀年銘の記載法として7種をあげ、古い時代のものは造塔の趣旨を述べ、造立者を刻し、造立時、その他を示すが、隆盛期になると記載する内容が簡単になり、主に被供養者と紀年銘を刻むに至るとした。造立の目的として、墓塔、追善供養塔、逆修塔をあげている。そして、神奈川県下在銘塔42基、また、鎌倉市内完形塔、不完形塔あわせて81基の資料も示している。

昭和16年になると日野一郎により、全国的な視野にたった宝篋印塔の報告がなされ(日野1941)、関東型式宝篋印塔については、その分布の中心を①信濃、②相模・武蔵、③上野・下野、④下総の4地域とした。

信濃は宝篋印塔形式が早くから発達した地域で、位置的に木曾路を経て関西の影響をうけ、中山道を経て北関東の影響をうけて大成された地域とした。相模・武蔵については、真言、天台、または禅宗の活躍したところでこれらの宗派が造塔業を採ったため、板碑、宝篋印塔などが数多く造立されたとした。上野、下野については、常陸、武蔵、信濃との文化的交流の結果、特殊な文化的集大成をなしたとげたとした。そして、いわゆる重層宝篋印塔の分布を指摘し、関東式諸調宝篋印塔という名称を提唱している。下総については、利根川下流域を分布範囲とする砂岩製の宝篋印塔を注目している。

戦後を経て、昭和32年には川勝政太郎により、大部な『日本石材工芸史』が刊行された(川勝1957)。

宝篋印塔について時期区分を行ない、第一期、鎌倉初期から中期の建治・弘安の頃まで(1278年以前)、第二期、正應・永仁頃より吉野時代の終りまで(1392年以前)、第三期、室町時代以降現代までとしている。そして、第二期に、関西・関東型式が整備、完成したとしている。

^(註1)
「関東形式」宝篋印塔について、各部の特徴を明記し「関西形式」宝篋印塔との明確な相違点として基礎の様式差と輪郭を巻く手法を指摘している。

「宝篋印塔を中心とする関西形式と関東形式」の項目では、関東型式の地域圏を愛知、岐阜、富山の各々東部と長野、静岡の西部地域内を想定しているとした。また、関東型式の成立については、「箱根山永仁塔」に刻銘がみられる、大蔵安氏からの一派の石大工が関東に定住し関東型式を成立させたと推察した。

昭和35年には再び川勝政太郎が関東型式宝篋印塔について論じた(川勝1960)。関東型式の成立については前論と異なり、また、関東型式が完備したのは徳治年間(1306年～)とした。

昭和40年には、鎌倉覚園寺の開山塔、大燈塔が解体修理され、翌41年には報告書が刊行された(伊原1966)。

昭和44年、石田茂作により大著『日本佛塔』が著わされた(石田1969)。形態、名称、伝来について、基本的論述を行ない宝篋印塔の構成を、13種の相輪、24種の^(註2)蓋、20種の塔身、30種の^(註3)基壇の組合せにより諸種の形容をなしているとしている。

宝篋印塔の地方的特徴として、関東、関西、九州各地方をあげている。たとえば、関東地方の特徴として、

1. 相輪の露盤には枡形を作る。
2. 蓋は五段屋根が多い。
3. 蓋の方立ては二曲が断然多い。
4. 蓋の方立てには輪郭を作る。
5. 塔身には縁を作る。
6. 基壇上面は三段に作る。
7. 基壇の腰には枡形彫刻するのが普通。
8. 下成基壇を作り蓮弁の下に二枡形また二香様をつくるのが多い。
9. 全階式

つまり、いわゆる関東型式宝篋印塔を全階式宝篋印塔として分類している。

その他、形態的に変形特殊なものとして、二重宝篋印塔、三重宝篋印塔、軒反り宝篋印塔、耳無宝篋印塔、佐渡式宝篋印塔、球心宝篋印塔などをあげている。

昭和45年に刊行された『新版考古学講座』7. 有史文化の中で、日野一郎は宝篋印塔の時期区分を5期に分けている(日野1970b)。

まず濫觴期、高山寺式塔群から弘安10年(1287)年頃まで、興隆期、正応5(1292)年～建武4(1337)年頃まで、洗鍊調整期、暦応2(1339)年～明德3(1392)年まで、余風継承期、応永元(1394)年～慶長16(1611)年まで、型的後退期、江戸時代としている。

昭和47年、田岡香逸により茨城県の宝篋山頂より発見された宝篋印塔が報告された(田岡1972)。この石塔の注目すべきは、箱根山塔より約30年も古い事で、また、型的にいわゆる関東型式

に近いことも明らかになったことである。氏はこれを素形という言葉で表現している。その他、高さをもつ基壇に着目し、これが関東型式の反花座に発展したと考えた。

昭和51年、『新版仏教考古学講座』第3巻、塔・塔婆が刊行され、日野一郎により関東地方の宝篋印塔が概略報告されている（日野1976）。

同年、田岡香逸は時代区分を発表している（田岡1976）。これは鎌倉時代、南北朝時代、室町時代を前、中、後期と3区分し、また、室町時代後期後半期を桃山時代に該当させている。また、石塔の大きさにもふれ、小形塔は四尺塔（120cm）以下、中形塔は五尺五寸塔（165cm）以下、大形塔は七尺五寸塔（225cm）以下、巨塔は八尺塔（240cm）以上としている。

昭和52年、野村隆により関東型式の宝篋印塔の分類が試みられた（野村1977）。分類の基準は反花座上面の反花数、笠隅飾の状況、笠上段の段数であったが、分類基準に資料をあてはめただけで、いわゆる関東型式の分類には及ばない内容であった。

昭和53年、鎌倉国宝館図録として『鎌倉の宝篋印塔』が刊行された（三浦他、1978）。市内に所在する代表的な19ヶ所の宝篋印塔を写真図版とともに説明を加えている。そして、関東型式宝篋印塔は、箱根山塔造塔以前にそれだけの素地はあったから成立したのであろうと推察している。具体的には『吾妻鏡』などの記事を引用して造塔供養することに対応できる技術をもった工人がいたことを指摘し、その工人たちの作った具体的な作品は発見できないが、それらが現在呼称している関東型式の原型になり得たのではないかと注目すべき点を示している。

昭和54年には、国の重要文化財である鎌倉市安養院の宝篋印塔が解体修理され、翌55年に報告書が刊行された（畑野1980）。その中で造塔計画を実測寸法から推察している。まず基準寸法を決める順序として、総高から相輪高へ、そして笠、台石（基礎）の幅と高さを決め、塔身、台座（反花座）の各部へといき、最後は各細部の大きさを決定するとしている。その結果、安養院塔はかなり自由な造塔計画が造っているとした。これは大変興味深い着眼であり、たとえば、相輪高は総高の0.25、笠の軒幅、基礎の幅は総高の0.3などとしている。各部材について、細部にわたって観察しており、たとえば反花座の上面の蓮弁に寸法むらがあることなどを指摘している。

以上、年代順に羅列してきたまでであるが、宝篋印塔の基本的論考などにはふれず、関東型式に係る内容に関してのみふれてきた。あるいは研究史の捉え方とすれば不備な点は歪めない。

昭和の初めから学界に報告されてきた関東の宝篋印塔であるが、石造美術的な研究指向の強かった観がある。箱根山塔を基点として考えられてきた関東型式宝篋印塔であるが、より古式の様相を備えた宝篋山塔の確認により、根本より考えなおす時期に至っていると思われる。今後は細部にわたる実測等、考古学的な手法による、より細密な研究法が必要であろう。

III. 各時代の宝篋印塔

本項においては、関東地方及び、関東近県所在の鎌倉、南北朝、室町時代の宝篋印塔について報告したい。完形塔はできるだけ実測図あるいは写真で示し、一部分の遺存であるものでも紀年銘がある場合は報告した。なお、無銘であっても様式的に重要な要素をもつ宝篋印塔は参考として報告した。

1. 鎌倉時代の宝篋印塔

(1) 箱根山塔 (第2図1、図版1、1)

箱根の精進池付近に建つ。相輪は後補、反花座はない。

基礎は上面三段の段形式で輪郭を巻き、みごとな格狭間を刻む。三面にわたって銘文があるが風化しているため判読できないので、赤星直忠(赤星1959)の解説を記す。『□箱根山之勝地湛精進池之靈』泉是当六道之池法界衆生之□』建当山中之宝塔安金剛□之全』文是則為□□興隆弘法之衆善』令跋護護国家之大願干時当文永』五年戊辰興國□□之□□□以』新□□□□六十六部之法華□』奉納□□已來重發大願干時』為一百余部之随求陀羅尼与並』法華經六部令此石塔安之以功』徳之□分□二所諸社之□□□廻』向之□□□□四□之□崩而已』我精立塔設化□□之□』名留碑石永斯竜華之朝』永仁四年^丙五月四日』大願主金剛仏子□円房祐禪敬白』』供養檀那行意並平氏女』為四恩法界成仏得道』供養導師良觀上人』正安二年八月廿一日心阿』結縁衆』武石四郎左衛門尉平宗胤』為月光源氏女源宗經』真法覚法八田氏女三善宗俊』西念淨心戒法七宝家日』觀阿一如坊平氏女及父母』平威氏鉢妙善妙』行事僧寂日随求陀羅尼持者』大工 大和国所生左衛門大夫』大藏安氏』願以此功德 普及於一切』我等与衆生 皆共成仏道』正面16行、東面5行、西面12行、内容は武石四郎左衛門尉平宗胤以下の結縁衆がこの塔を永仁四年五月四日に造立し、大工は大藏安氏であった。そして、その後正安二年八月二十一日良觀上人を導師として供養したと記している。

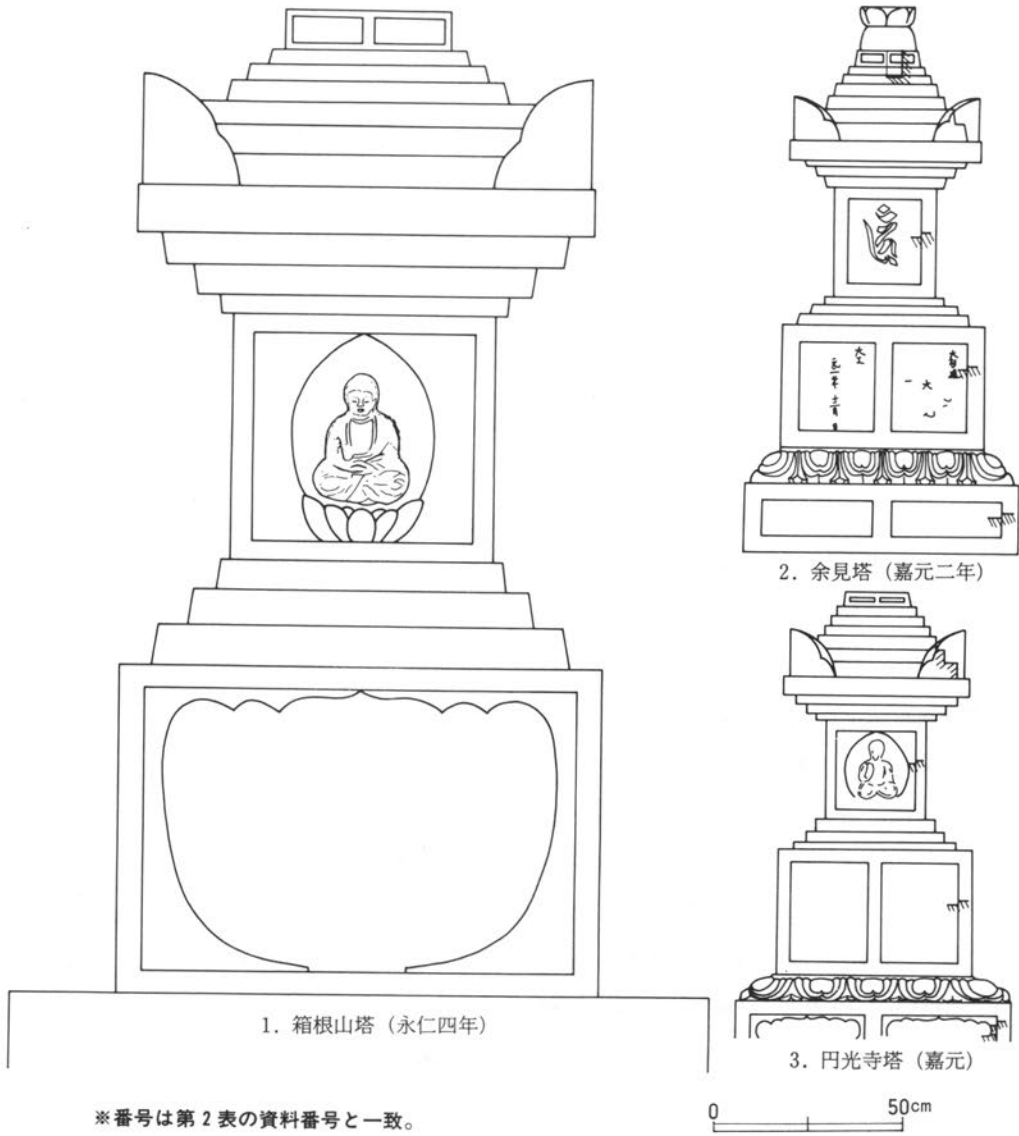
塔身も輪郭をもち、正面に釈迦像、他の三面には胎蔵界四仏の種子を刻む。笠は下三段上七段で隅飾は二弧無地、軒と笠下二段の側面各面に梵字で宝篋印陀羅尼経を刻む。

(2) 余見塔 (第2図2、図版1、2)

足柄下郡大井町にある石井醸造株式会社の北東側丘陵西麓にある。

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、上面には単弁四葉を配し隅も単弁を刻出している。基礎は上面三段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ち、正面には『大勸進僧覚一』大仲臣金光』一結衆五十人』大工藤原頼光大念佛□安□』嘉元二年^辛十二月廿日』と刻む。

塔身も輪郭を巻き、内面には金剛界四仏の種子を刻む。笠は下三段上七段で最上段は輪郭にて二区に分ち露盤を作る。隅飾は直立し二弧で各面素面である。



第2図 宝篋印塔実測図(1)・(縮尺1/20)

(3) 円光寺塔 (第2図3、図版1、3)

反花座は土中に埋もれており一部計測不可能であった。

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、内面に格狭間を刻む。上面には単弁三葉を配し隅にも単弁を刻出している。基礎は上面三段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ち『建久三年』大施主有』と刻まれているが「建久」の二字は改刻であるという。

塔身は輪郭を巻き、正面を光背形に彫り込んで坐像を配す。他の三面には金剛界の種子を彫り込んでいる。笠は下三段七段で最上段を輪郭にて二区に分け露盤としている。隅飾は直立し

二弧、各面素面である。

(4) 大見寺塔 (第3図4、図版2、4)

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、その内部にやや縦長の格狭間を配す。上面は複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出する。

基礎は上面三段で側面を輪郭にて二区に分ける。塔身は輪郭を巻き、正面には『徳治三年^景六月廿三日』沙^口河』、また左側には『^口』入道』^口阿』と刻む。

笠は下二段上五段で最上段は輪郭にて二区に分け露盤とする。

(5) 安養院塔 (第3図5、図版1、5)

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、内部には格狭間を刻む。上面には複弁五葉を配し、隅も複弁を刻出する。

基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ち。内面には次の銘文が確認される。西面『大工沙弥心阿』大檀那沙弥観泉』、北面『^口慶^口塔婆』^口以之』、東面『^口結縁衆之』名字^口奉造立如件』^口治三季^景七月日』

塔身は輪郭を巻き、各面線刻した月輪内に金剛界四仏の種子を配す。笠は下二段五段で最上段を輪郭にて二区に分ち露盤とする。隅飾は二弧で各面輪郭を巻き、全体的にやや強く外反し、先端が尖る。相輪は後補である。

(6) 仏岩塔 (第3図7、図版2、7)

岩峯が突出している尾根のひとつの岩の平坦部に塔は建っている。

上面に一段造り出した基壇には、銘文がある。信濃史料で解読されたものにしたがっておく(山崎1981)。南面『応長第一之曆南呂上旬』^口^口弟子^口^口菩薩^口^口』妙法^口^口人生^口滅罪^口』出離生死頓証菩提仏果』円満万至法界平^口利益^口』^口印^口石塔波一基所』造立供養如件』敬白』

西面『肥前大守成阿弥陀^口^口』 北面『息女并日光峯宮^口』 東面『近江禅閣^口善生^口』

基礎は上面三段の段形式で、側面には輪郭を巻き、宝篋印陀羅尼を種子で刻む。塔身は笠に1.2cm、基礎に1.5cmほど抉り込む。輪郭を巻き、各面月輪内に金剛界四仏の種子を彫る。

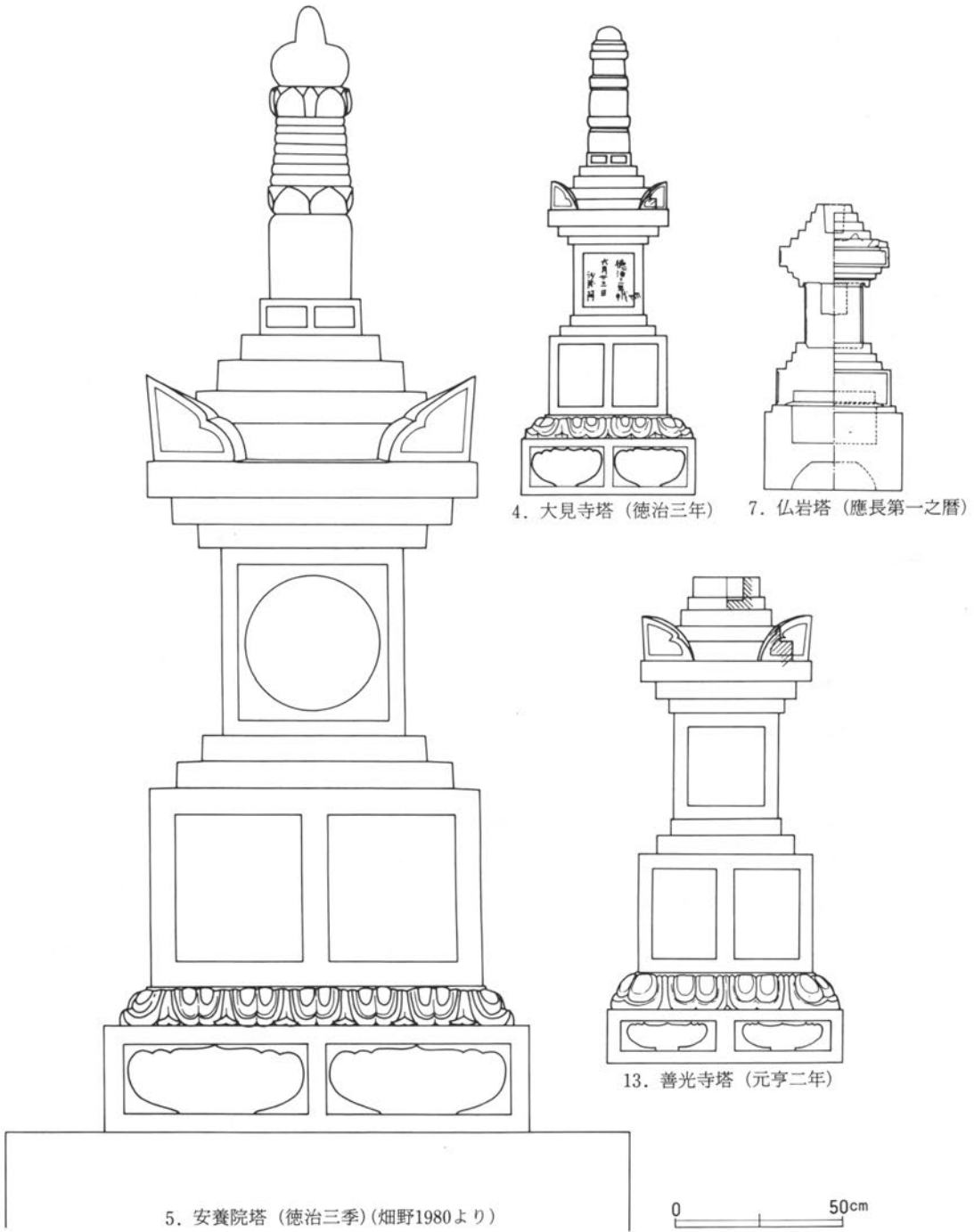
笠は下三段上五段で軒には輪郭を巻き、基礎と同様に宝篋印陀羅尼を刻む。隅飾の根痕はあるが各部様式は全く不明である。

(7) 善光寺塔 (第3図13、図版2、13)

善光寺は荒川の河岸にある寺院で石塔は墓地内にある。全体的にみて調和を欠く塔のため、あるいは混在している可能性もある。

まず、反花座は側面を輪郭で二区に分ち格狭間を刻む。格狭間は背が低く、左右各2個の茨は端寄りであり肩は高いが側線はふくらむ。上面には複弁二葉を配し隅にも複弁を刻出する。

基礎は上面二段の段形式で、輪郭で二区に分ける。正面には『八月』妙慶一人』廿二日』^口



※7. 仏岩塔、昭和46年7月29日、福沢氏実測 (山崎他、1981より)

第3図 宝篋印塔実測図(2)・(縮尺1/20)

□「元亨二年」□□』の銘文が確認される。塔身は輪郭を巻き内部は素面。笠は下二段上五段、上面には径10cm、深さ6.8cmの柄穴を穿つ。

(8) 光福寺塔 (第4図14、図版2、14)

保存庫の中に嘉元四年銘の弥陀三尊板碑と並んで建つ。相輪の八輪以上を欠損するが、規模的には八尺塔位であったと思われる。

基礎の上面は反花で、複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出する。側面は輪郭を巻き、内面に次の銘文を確認する。『奉造立宝篋印塔一基 右塔婆者 大日本国武州比企庄大岡 □□山光福禪寺沙門鏡空了円 元亨癸亥 □仏成道月起之誌之牟 大檀那比丘尼妙明 藤原光明朝臣 施主沙弥円阿』

塔身は輪郭を巻き、正面中央に『寶篋印塔』と彫る。笠は下二段上四段で最上段は輪郭を巻き内部は格狭間を彫る。隅飾は二弧で外反し、側面には輪郭を巻く。

(9) 松月院塔

各部材別個体の石塔である。

基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分け、内部に次の銘文を認める。『元徳元年 九月十二 比丘尼 了雲』と刻む。

塔身、笠、相輪の一部を認めるが基礎より新しい時代のものである。

(10) 安竜寺塔 (第4図17)

基礎と笠のみの遺存である。

基礎は上面二段の段形式で側面は二重に輪郭をもつ。正面『前住當山 海雲和尚 安公禪師』左面『未初伽素 □□偈 泊然而化』 右面『元徳三年 三月塔成』と刻まれている。

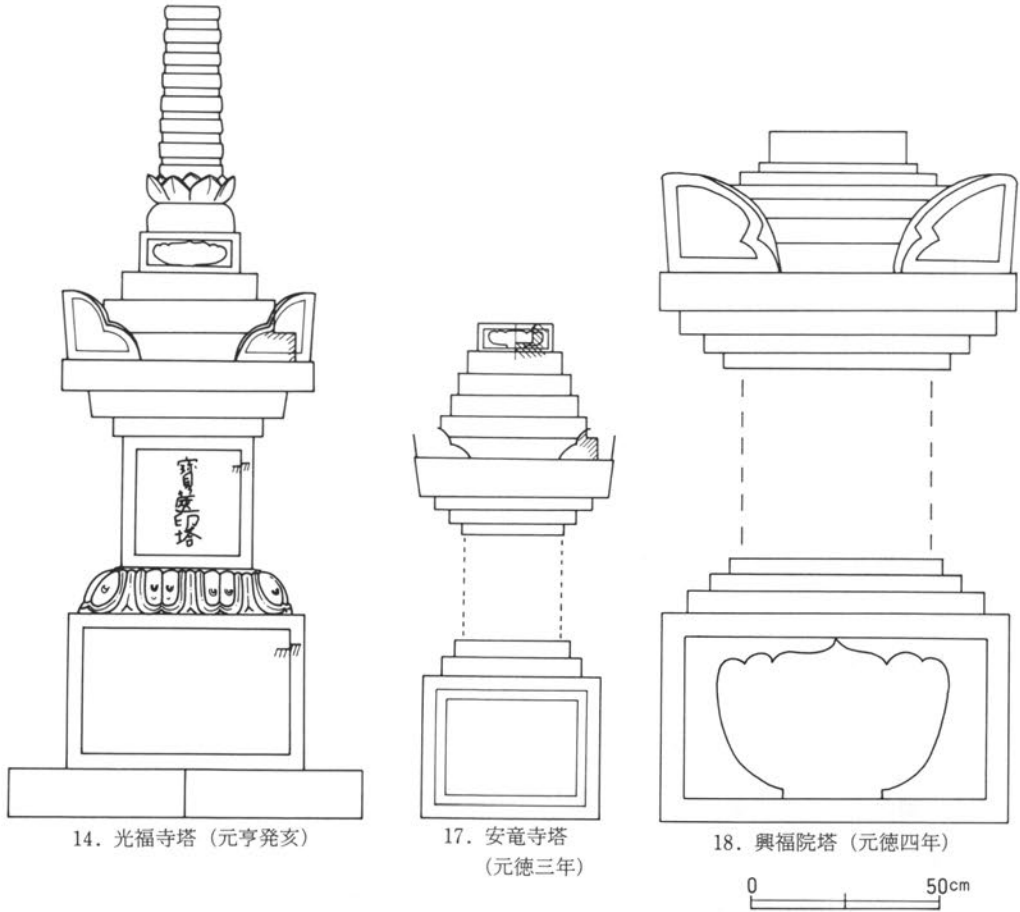
笠は下三段上六段で、軒幅が50.5~53cmを示すのに比べ、総高は55.2cmと高い。最上段は輪郭をもち、内面には格狭間を確認する。隅飾は欠損しているが二弧で各面素面である。軒が外反するような新しい要素もみられるが、下三段上六段で露盤に格狭間をもち、隅飾が二弧素面などと古い要素をもつ笠材である。

(11) 興福院塔 (第4図18、図版3、18)

箱根芦ノ湖畔の興福院の庭にある石塔。塔形とすれば整っていないが、基礎及び笠は同一材と思われる。基礎の大きさからみれば全高300cmは測る、10尺塔の堂々たるものであったと考えられる。

基礎は側面を輪郭にて巻き、内部に格狭間を刻む。そして次の銘文を認める。『願以此功德 普及一切 我等与衆生 皆共成仏道 元徳四年 五月五日 道泉敬白 大工兵衛耐安行 小工九人』

笠は下三段上七段で、隅飾は二弧、各面輪郭を巻き全体的に外反する。



第4図 宝篋印塔実測図(3)・(縮尺1/20)

(12) 覚園寺塔 (第5、6図)

両塔ともに拝観はできないため、特徴などの記述は報告書からの引用になる(伊原1966)。

反花座は側面を輪郭にて二区に分け、そこに刻銘がある。開山塔北面『開山大和尚』 東面『正慶元年壬申』沙弥禅門口阿 仲冬廿七日造立』 南面『當事惠秀』願主尼良阿』大工光広』 西面『住山鑿惠』 大燈塔北面『正慶元年壬申』大燈大和尚之塔 仲秋廿八日造立』 東面『住持比丘鑿惠敬誌』 南面『建立尼円観』 西面『當持比丘惠秀』大工光広等』 内面には格狭間を刻む。また、上面には複弁四葉を配し、隅も複弁を刻出する。

基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ち、開山塔は各面月輪内に八大菩薩の種子、大燈塔には各面月輪内に八大仏頂の種子を配す。

塔身は輪郭を巻き、各面月輪内に金剛界四仏の種子を刻む。笠は下二段上七段で最上段は輪郭にて二区に分ち、内面に格狭間を刻み露盤としている。隅飾は二弧で側面は輪郭が巻く。

相輪はやや下ぶくれの宝珠、
単弁の蓮弁を示す請花、隆帯
状の九輪を認める。

開山塔の下の石室からは、
古瀬戸の骨蔵器1点、基壇内
からは黒釉壺1点、銅製五輪
塔1基、また、塔身にあげら
れた穴からは、銘石1点、苔
経三結五九葉が収納されてい
たということである。

大燈塔の基壇内からは古瀬
戸壺1点、塔身の上面に穿た
れた穴からは、水晶五輪塔1
基、銘板1点が収納されてい
た。

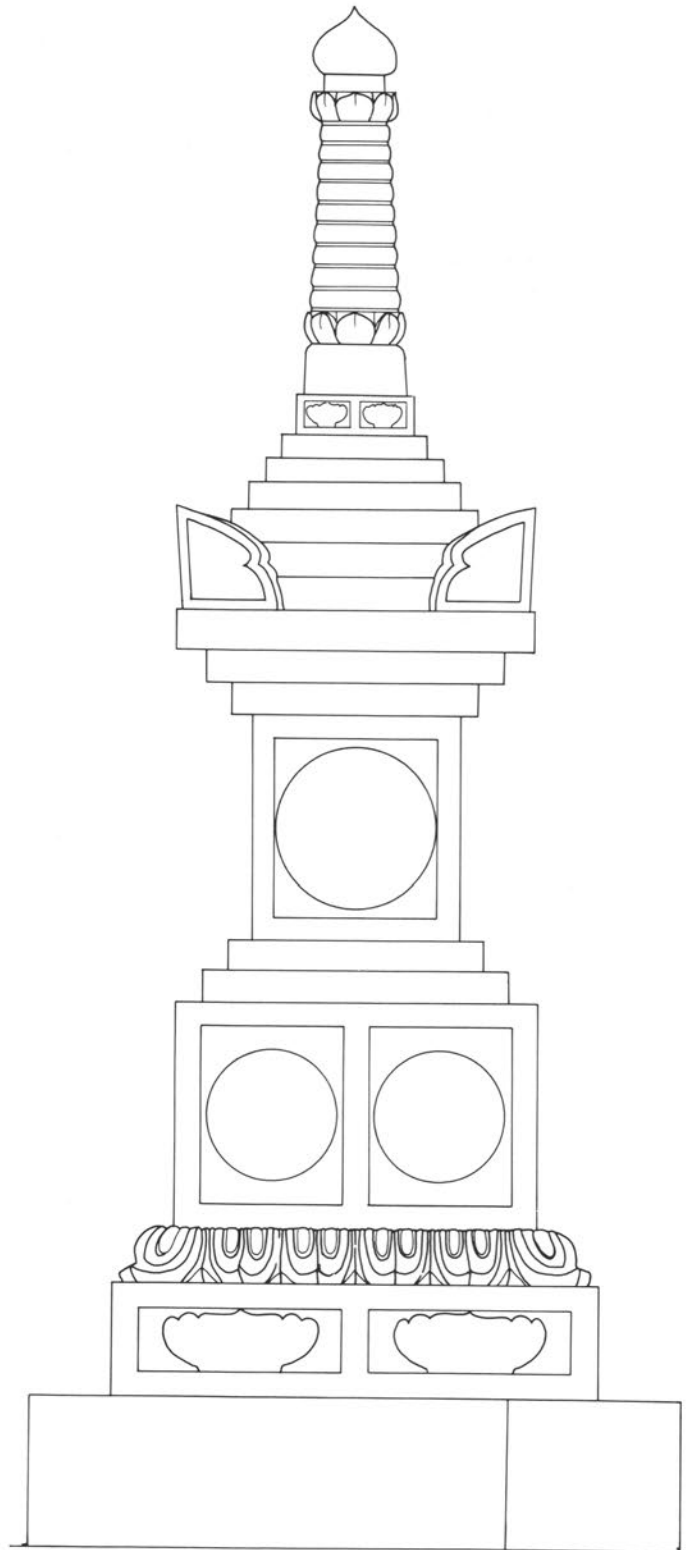
2. 南北朝時代の宝篋印 塔

(1) 鶏足寺塔 (第7図28、 図版3、28)

鶏足寺本堂裏の墓地内にあ
る。

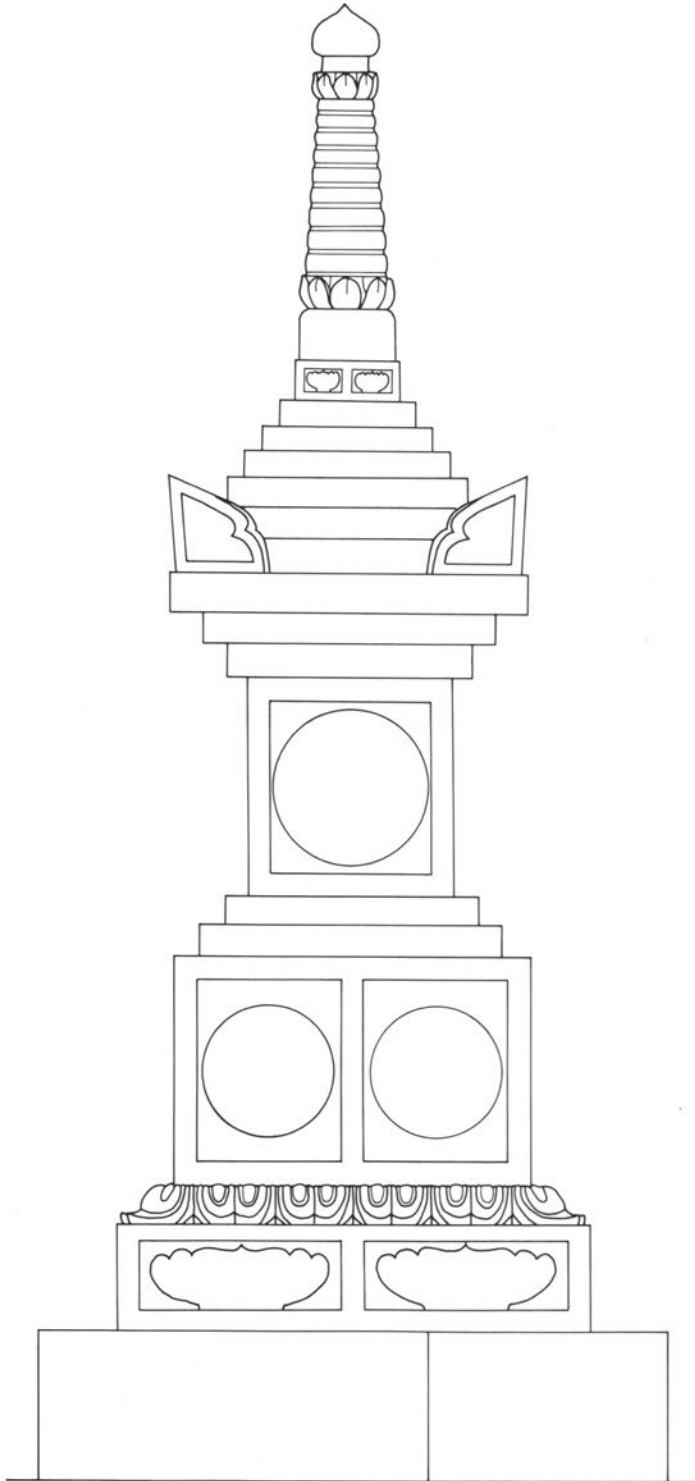
基礎は反花式で、側面は輪
郭にて二区に分け、一面に康
永四年九月他と刻む。上面の
反花は複弁二葉をもち、隅も
複弁を刻出する。反花はきわ
めて高さをもち、下面のみ彫
り込む。

塔身は幅に比べ高さをもつ。
笠は下二段上四段で最上段は
輪郭にて二区に分ける。柄穴



19. 覚園寺開山塔 (正慶元年)(伊原1966より)

第5図 宝篋印塔実測図(4)・(縮尺1/20)



20. 寛園寺大燈塔（正慶元年）（伊原1966より）

第6図 宝篋印塔実測図(5)・(縮尺1/20)

は径7cm、深さは2.5cmと浅い。隅飾は背面が球状を呈し、覆いかぶさる感じである。また、輪郭にて二弧を示す。

(2) 徳性寺塔（第7図30、
図版3、30）

反花座の上面幅に比べ、基礎の幅のほうが数cm上回ることから、反花座は別材と思われる。

基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ける。正面には『右志者為覚遠井也 貞和元_二曆_一十二九敬白』の銘文が彫られている。

塔身は輪郭を巻き、正面に阿弥陀如来の種子を彫り、他は素面。笠と基礎に約0.5cm挟り込まれている。笠は下二段上五段で最上段は輪郭にて二区に分かつ。隅飾は若干外反し、各面輪郭を巻き、二弧を示す。柄穴は径6.2cm、深さ4.5cmを測る。

(3) 塩沢寺塔（第7図31、
図版3、31）

甲府市の郊外、湯村にある塩沢寺の北側斜面に建つ石塔。全体の構成をみると台座と基礎が同一材であり、ほかの塔身、笠、相輪であるところから4材による構成である。

幅74cm、高さ25cmの台座の上に上面三段の基礎を彫る。基礎の側面は線刻により二区に分かれ、内面に格狭間を刻む。これは壇上積型式の手法を見せるものである。

塔身は二重に輪郭を巻き、正面の内面には十二天の風天の種子を刻む。また、笠及び基礎に約1cmつづかり込む。

笠は下三段上五段で上面には径10cm、深さ8cmの柄穴が穿たれている。隅飾は各面輪郭を巻き、二弧で外反する。

(4) 達摩堂塔(第7図32、図版4、32)

各部材とも計測値があわず、乱積と思われる。

基礎は上面二段の段形式で、側面を輪郭にて二区に分かれ、正面に『観応二年^{辛卯}』二月五日^{孝子敬白}』と刻む。塔身は各面輪郭を巻き金剛界四仏の種子を彫る。笠は下二段上三段で隅飾は各面輪郭を巻き二弧で外反する。

(5) 棲雲寺塔(第7図33、図版4、33)

笛吹川の上流、大菩薩稜の南側、山々に囲まれた棲雲寺の境内に資料番号35と並列して建つ。

台座は高さ22cm、幅67.5cm、基礎は上面二段の段形式で、側面は二重輪郭により二区に分かれ、内面には格狭間を刻む。なお、側面上には線刻に近い状態で特徴的な単弁五葉を刻出する。

塔身には線刻による輪郭を二重に刻む。正面には『開山業海』浄禅師塔』観応^{壬辰}七月誌』と刻まれている。なお、塔身は笠と基礎にかり込む。

笠は下二段上四段で上面には径9.5cm、深さ9cmの柄穴が穿たれている。隅飾は大型で二弧、側面には輪郭が巻く。相輪は三輪以上を欠く。伏鉢、請花には線刻による単弁の蓮弁が刻出されている。

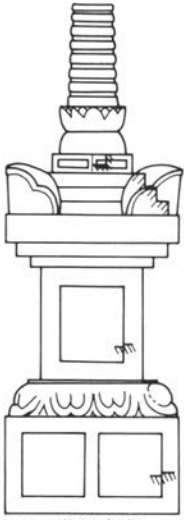
基礎の側面は、壇上積型式の手法をみせる独特のものである。

(6) 上行寺塔(第7図34、図版4、34)

この石塔は紀年銘が磨り消されているので明確には建立年がわかっていない。ただ、干支が「壬辰」と刻まれているので、文和元年か応永十九年に該当するということになる。赤星直忠は、それを全高に対する相輪高の比率から後者としている(赤星1959)。しかし、石塔の各部を観察してみると、相輪は別材の可能性が高い。

塔身、基礎、反花座は全体的に風化しており、特に角の部分が丸味をもっている。それに比べ相輪は請花の蓮弁、隆帯状を示す九輪などの彫り込みが明瞭であり、また、相輪と笠上面の接合が不安定である。笠は、本来風化が顕著であるにもかかわらず、塔身以下の各部材に比べ風化は進んでいない。つまり、相輪、笠、塔身以下と3つの石塔の混在と思われる。したがって、別材である相輪の比率を求めても何ら根拠のあるものではない。

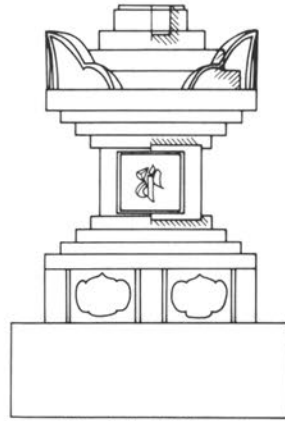
反花座は側面を輪郭にて二区に分け、上面には複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出している。



28. 鶏足寺塔
(康永四年)



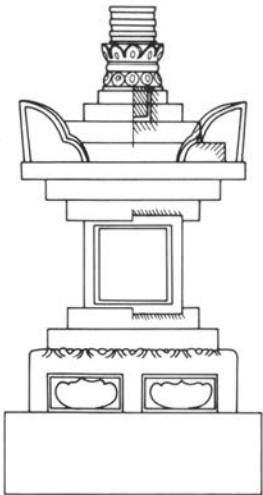
30. 徳性寺塔
(貞和元)



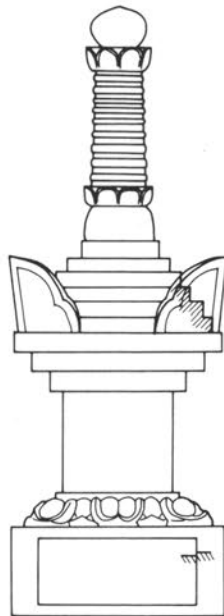
31. 塩沢寺塔 (貞和六季)



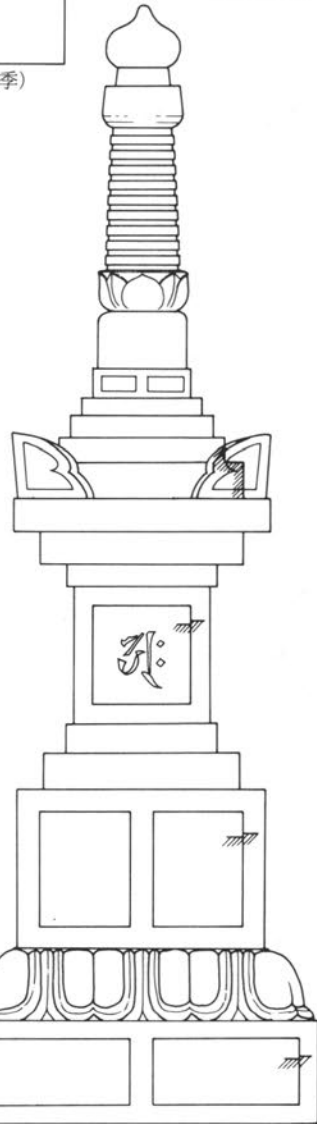
32. 達摩堂塔
(観応二年)



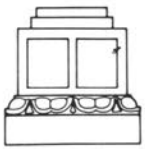
33. 棲雲寺開山塔 (観応辰)



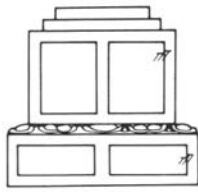
35. 棲雲寺普同塔
(文和癸巳歲)



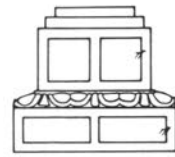
34. 上行寺塔 (図面複製)



36. 稱名寺塔
(文和二年)



37. 稱名寺塔
(文和六年)



40. 稱名寺塔
(延文三年)

0 50cm

第7図 宝篋印塔実測図(6)・(縮尺1/20)

基礎は上面二段の段形式で、側面には輪郭を巻き内面には次の銘文を刻む。『右志趣者為四」季経別書写」読誦一結衆等別」牛馬六畜乃至法」界平等利益也」□□_全」十二月日』。

塔身は輪郭を巻き、全剛界四仏の種子を刻む。笠は下二段上五段で最上段の側面を輪郭にて二区に分ちち露盤とする。隅飾は二弧で輪郭巻き、若干外反する。

この石塔を南北朝時代前期としたのは、各部にその特徴が示されているからである。まず反花座上面の複弁が側面高に対し、高さをもっており、弁の形状は立ち上がる状態に刻まれる。塔身の金剛界四仏種子も、鎌倉時代の力強い刻み方から、一步引いた退化形式を示している。したがって『□□_全』を『囟囟_全』と判断するのである。^(註4)

(7) 棲雲寺塔 (第7図35、図版4、35)

棲雲寺の本堂横に資料番号33の宝篋印塔と並び建つ。

この石塔は「普同塔」と呼ばれているが、その下部より口径42cm、高さ67.5cmを測る常滑の大甕が出土している(小野1984)。口縁部は複合口縁状を示し、口縁内側は有段、肩部は「く」の字形に張り、「天」のスタンプ文を持つ。胴部から底部にかけては、ほぼ直線的にすぼまる形態である。

石塔の特徴を示すと、基礎は上面中央複弁一葉の左右に間弁を入れ、複弁の反花を刻出している。側面は輪郭を巻き、内面に格狭間を刻出する。

塔身は正面に『普同塔』、背面に『文和癸巳歲』自恣日建立』と刻む。笠は下二段上六段、隅飾の先端は五段の位置までいき、大型で二弧、各面輪郭を巻く。

相輪は球状を示す宝珠、蓮弁を刻出する請花、素面の伏鉢を認める。

(8) 称名寺塔 (第7図36、37、40)

三基は並列して建っており、塔身の部分に五輪塔の水輪、相輪の部分に同じく五輪塔の空風輪を乗せる。笠材は宝篋印塔の笠を認めるが、基礎とは別材と思われる。

反花座は36は側面素面、37、40は輪郭にて二区に分ける。上面の反花は36、37が複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出する。40は中央に単弁一葉、その左右に複弁を配し、隅も複弁を刻出する。

基礎は上面二段の段形式で、側面を輪郭にて二区に分ける。内面にはそれぞれ次の銘文を認める。36は『文和二年』八月日』、37は『广□□佛』□月五日』文和 乙未』□□』、40は『延文三年』。

(9) 泣き塔 (第8図38、図版5、38)

鎌倉市の国鉄大船工場の一隅にあり、その背面にはヤグラがある。

反花座は、側面を輪郭にて二区に分ちち、上面には複弁二葉を配し、隅にも複弁を刻出する。蓮弁は立ち上がりが顕著であるが、丸味に欠けやや平面的である。

基礎は上面二段の段形式で、側面の上四隅がやや突起するのが特徴。輪郭にて二区に分ち、三面に次の銘文がある。『願主行浄』預造立』石塔婆』各々檀那』現世安穩』後生善処』文和五年^丙_甲』二月廿日』供養了』。塔身は輪郭を巻き、各面に金剛界四仏の種子を刻むが、その書体も弱く拙劣である。

笠は下二段上五段で隅飾は外反し二弧で各面輪郭をもつ。

(10) 京徳観音塔 (第8図41、42、図版5、41、42)

両塔とも細部の計測値は異なるが、ほぼ同規模の石塔である。

反花座は側面を輪郭により二区に分ち、上面には複弁二葉を配し、隅にも複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面を輪郭により二区に分ち。塔身は輪郭を巻き、41には『延文六年七月^上日』逆修』道用』、42は『延文六年七月^上日』逆修』性阿弥陀仏』と銘文がある。

笠は下二段上五段、最上段は輪郭により二区に分ち。隅飾はやや外反し、二弧で各面輪郭を巻く。

(11) 須賀神社塔 (第8図46、図版5、46)

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、上面には複弁二葉、隅にも複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面を輪郭にて二区に分ち、正面に『大師』貞治五年』十二月廿七日』と刻む。塔身は各面輪郭を巻き金剛界四仏の種子を彫る。

笠は下二段上四段、上面には径5.5cm、深さ4cmの柄穴を穿つ。隅飾は二弧でかなり外反し、各面輪郭を巻く。

(12) 実相院塔 (図版5、48)

相輪の伏鉢を欠くが、総高216cmを測るところから八尺塔に近い大型の塔として造立されたと思われる。

反花座は、側面と反花とに部材がわかれるため、全体の構成は6材になる。基礎は上面一段の段形式で、側面を輪郭にて二区に分ち、内面には格狭間を刻む。格狭間は形状的には南瓜状を示す。

塔身は二重に輪郭を巻き、内面には金剛界四仏の種子を刻む。笠は下二段上五段で、最上段は輪郭にて側面を二区に分ち露盤とする。

相輪は伏鉢の部分の欠くが当初のものと思われる。半球形を示す宝珠、外反するように刻まれた請花、隆帯状の九輪などよく時代を示す。

(13) 東光寺塔 (第8図50、図版6、50)

東光寺の西側尾根の墓地内に建つ。反花座は認められないが総高215cmを測る大型の塔である。

基礎は上面二段の段形式で、側面を輪郭にて三区に分ち、三面にわたって次の銘文を認める。『發智』兵部元金□』平為時』逆修』大室得用』應安』巳酉』八月十八日』。

塔身は各面輪郭を巻く。笠は下二段上五段。隅飾は笠材の大きさに比べてきわめて規模が小さい。各面は輪郭を巻き、二弧で外反する。相輪は球状を示す宝珠、無文の請花、隆帯の九輪、複弁を刻む伏鉢が特徴的である。

(14) 光明寺塔 (第8図51)

反花座・基礎のみの遺存である。

反花座は側面素面、上面は複弁二葉を配し隅も複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分かつ。内面には『應安二年』逆修』十一月日』と刻む。

(15) 達摩堂塔 (第8図52、図版6、52)

達摩堂の前に五輪塔などとともに建つ石塔、状態から各部材乱積の可能性が強い。

反花座は側面素面、上面は複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出する。複弁は線刻に近く、微かに立体観をもたせたものである。

基礎は上面二段、側面は輪郭にて二区に分ち、正面には『應安第三』六月廿三日』と刻む。笠は下二段上四段、隅飾は二弧で輪郭を巻く。

(16) 知足院塔 (第9図)

知足院は臨濟宗妙心寺末寺。石塔は本堂裏の藪の中にあり、基礎のみ残存。今はその上に別の塔が建つ。

基礎は段形式で上面二段。横52cm、側面高37cmを測る。3面に2体ずつの地藏像を線刻し、また、条線の輪郭を施す。他の1面には、『奉安』一切尊經六千十一卷』石塔一基伏願』天長地久国泰民安』應安五季_壬四月五日』諸壇那道有等志』と刻む。

(17) 平親王塔 (第8図54、図版6、54)

すでに紹介しているが(斎木1980)改めて報告したい。現在は市原市の上総国分寺の門前にあるが、以前は数km北にある、市原市菊間の平親王山にあったという。

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、上面には複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出する。弁そのものはかなり大きく刻む。基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ち、正面には次の銘文を認める。『應安第五』十二月三日』。塔身は輪郭を巻き素面である。笠は下二段上五段で、最上段は輪郭にて二区に分ち露盤とする。隅飾は直立し、二弧で各面輪郭を巻く。

(18) 網子塔 (第10図55、図版6、55)

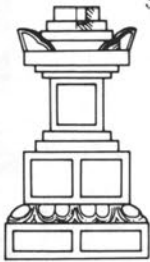
上越の谷川岳のふもと、群馬県利根郡水上町大字網子にある石塔。

基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭をもち二区に分ち。その北面と東面に次の銘文を確認する。北面には『大檀那南無阿弥陀佛』藤原守泰』、東面には『□』永和二年丙辰』八月廿六日』一結衆□□』と刻む。

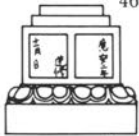
塔身は輪郭を巻き、各面に胎藏界四仏種子を刻む。笠は下二段上五段、隅飾はほぼ直立し、



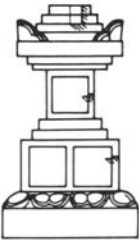
38. 泣き塔
(文和五年)



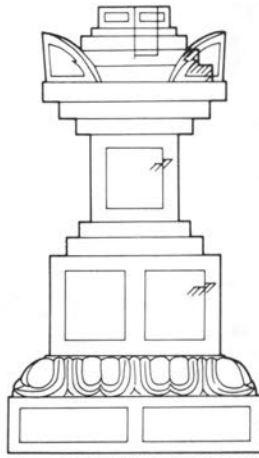
46. 須賀神社塔
(貞治五年)



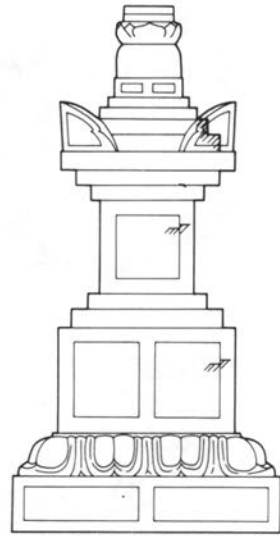
51. 光明寺塔
(應安二年)



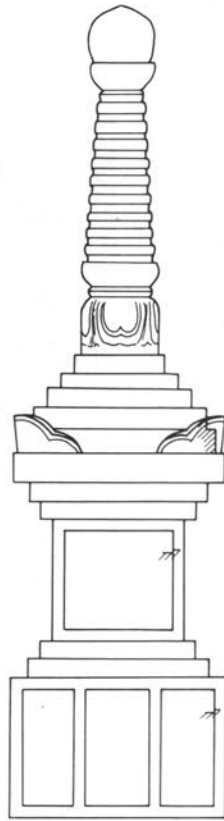
52. 達摩堂塔
(應安第三)



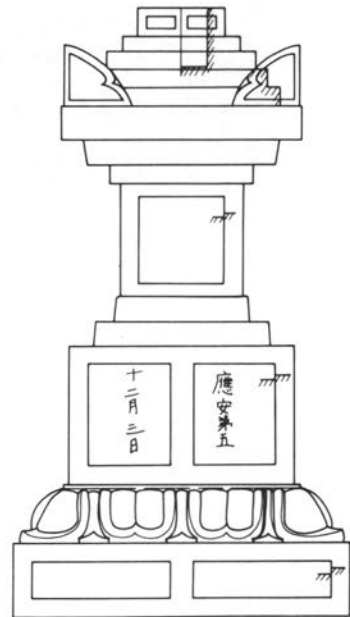
41. 京徳観音塔 (延文六年)



42. 京徳観音塔 (延文六年)

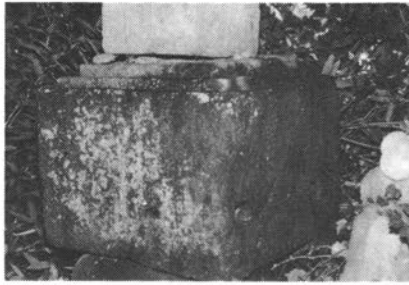


50. 東光寺塔 (應安己酉)

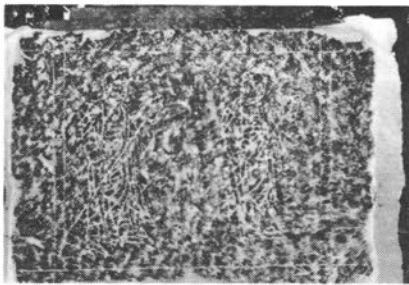
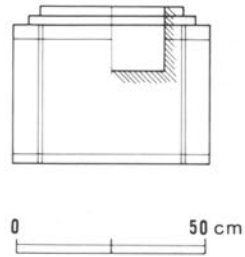


54. 平親王山塔 (應安第五)

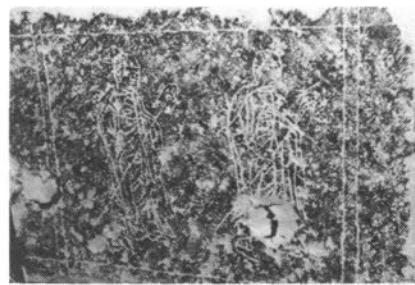
第8図 宝篋印塔実測図(7)・(縮尺1/20)



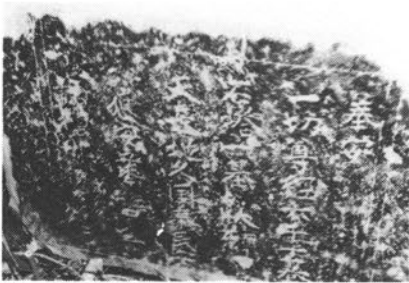
53. 知足院塔（應安五季）



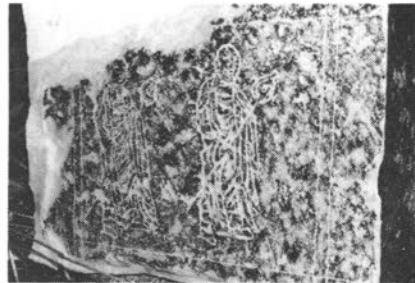
背面



左側面



正面



右側面

第9図 知足院塔実測図(縮尺 $\frac{1}{20}$)・拓影図

二弧で輪郭をもつ。その高さは段形の二段目より微かに高いくらいで、全体形よりみればきわめて低い。

(19) 西方寺跡塔(第10図57)

上杉憲方逆修塔ともいわれている。

反花座は側面輪郭にて二区に分ち、格狭間を刻む。上面には複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出する。

基礎は上面二段式で、側面には輪郭が巻き二区に分けられる。そのそれぞれには銘文がある。『鎌倉市史考古編』(赤星1959)では、赤星直忠により次のように読まれている。『右志趣者奉

為房州」禪閣道合逆修作善」宝篋印塔一基所」令造立也依此善根」致現世寿命長達」願主証得菩提乃至」法界平等利益仍逆修」作善所願如件」永和五年_景五月十三日」善女_敬」。

塔身には金剛界四仏の種子を刻む。全体からみれば塔身は小規模である。

笠は下二段上五段で、最上段は輪郭にて二区に分け露盤とする。隅飾は外反し、二弧で側面は輪郭を巻く。相輪は六輪以上を欠く。

(20) 浄妙寺塔 (第10図70、図版7、70)

浄妙寺本堂背後の墓地内にある。

反花座は輪郭で側面二区に分ち、上面には複弁二葉を配し、隅にも複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分けた。『鎌倉市史考古編』(赤星1959)によると次の銘文が三面に記されているという。『奉造立」石宝篋印」塔一基」右志趣者」預□当」来善報」逆修滅」後善根」御願一既」靈地□」現無辺」罪滅悉」陰□□」□□□」種智都」也」明德三」圀国申」二月廿四日」預修一□」結諦□』。

塔身は輪郭を巻き、正面は宝生如来坐像を刻み、他の三面には金剛界四仏種子を刻出している。笠は下二段上五段、隅飾は二弧で各面輪郭を巻き、ほぼ直立する。

相輪は、先端がやや尖る宝珠、単弁の請花を認める。

(21) 由比ヶ浜塔 (図版7、78)

鎌倉の若宮大路の一ノ鳥居付近にある塔で畠山六郎重保墓塔との伝えがある。

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、上面には複弁二葉を配し、隅も複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭により二区に分ち。その内面には『明德第四』_景霜月三日大願主」比丘道有』と銘文が刻まれている。

塔身には輪郭が巻き、金剛界四種子を刻む。笠は下二段上五段で最上段は輪郭にて二区に分ち。隅飾はやや外反し、輪郭巻きの二弧である。

相輪は笠材以下に比べ、風化がないところから別材である可能性が高い。

3. 室町時代の宝篋印塔

(1) 無量光寺塔 (第10図87)

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、上面は複弁二葉を配し、隅にも複弁を刻出する。複弁は立体観がとほしく平面的である。

基礎は上面二段の段形式で側面は輪郭にて二区に分ち、その正面には『應永二年』十月十六日』と刻む。

塔身は各面輪郭を巻く。笠は下二段上五段で、隅飾はやや外反し、二弧で各面輪郭を巻く。

(2) 宝勝寺塔 (第10図108、図版7、108)

群馬県甘楽郡は笠塔婆等、石造美術が多い地域で、その宝勝寺という寺院には、この宝篋印塔と板碑がある。

高さは83cmを測るところから2尺8寸塔として造立されたものと思われる。

基礎は上面二段の段形式で、側面を輪郭で二区に分ける。内面は刻銘があるようだが、風化が著しく判読しがたい。ここでは川勝政太郎の『日本石造美術辞典』(1978)にしたがっておく。基礎三面の二区に各一行の梵文光明真言を刻み、残る一面の左に『応永八年^丑』二月三日』と記しているという。

塔身は各面線刻した月輪内に胎藏界四仏の種子を配す。笠は下二段上四段、隅飾は磨滅により不明である。相輪は扁平な宝珠の下、8本の隆帯状の九輪、無文の請花、伏鉢を認める。

(3) 国济寺塔 (図版7、114)

基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭が巻き、線刻した月輪内に金剛界四仏を配す。塔身も同様に各面輪郭を巻き、径8.5cmの線刻した月輪内に胎藏界四仏を彫る。

笠は下二段上四段で、軒の中央及び左右に寄った箇所鎖線文を施す。なお、隅飾は一弧で元のほうが外側に巻き、内面の茨は大きく外側に巻く。

(4) 北野神社塔 (第10図117、図版8、117)

鎌倉市の通称天神山と呼ばれる丘陵の上に北野神社があり、その本殿の左に建つ。

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、上面は複弁二葉を配し、隅にも複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ける。その二面四区に銘文が刻まれている。なお磨耗も激しいので、『鎌倉の宝篋印塔』(三浦他1978)を引用すると『本州山崎[□]主[□]教音[□]久起造[□]大[□]□□□□[□]祖者[□]□□勝[□]□□天神靈[□]此時[□]進石浮[□]図[□]□□書[□]字[□]□□妙典[□]夫作善[□]圖旨者[□]天長地久国治[□]民安[□]□□□世[□]界無主[□]魂俱[□]沐余[□]同起[□]海[□]□[□]応永十二稔乙酉八月二十五日[□]信士教音敬白[□]』と確認されるという。その内容はこの山崎に住む教音という者が、諸々のお祈りをし、お経を写し、それを埋めて塔を作ったということであった。

塔身は各々輪郭をもち蓮華座上に光背形に彫り込み、坐像を刻出している。笠は下二段上五段で上面には径12cm、深さ14cmの柄穴が穿たれている。隅飾はやや外反し、二弧で輪郭を巻く。

(5) 清澄寺塔 (第10図122、図版8、122)

千葉県安房郡天津小湊町に所在する清澄寺には、表記の宝篋印塔のほか同型式のものが3基(資料番号118、無銘2基)ある。

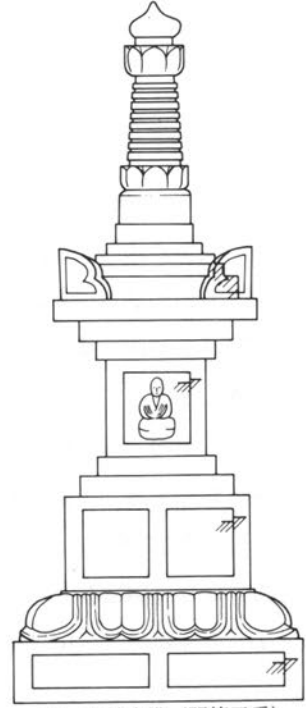
反花座はみあたらず、基礎は上面に中央複弁一葉を刻む。また左右に間弁を配し、隅も複弁の反花を刻出する。基礎正面には次の銘文が確認される。『千光山清澄寺^巖奉建立十三基^巖塔右志者為^巖現世安穩後^巖生善處次者^巖奉三千僧供^巖養也房州三^巖原東小田徳成^巖同了榮敬白^巖』



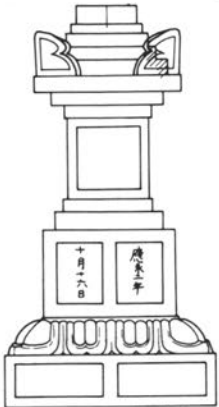
55. 網子塔
(永和二年)



57. 西方寺跡塔 (永和五年)



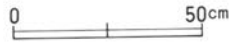
70. 浄妙寺塔 (明德三季)



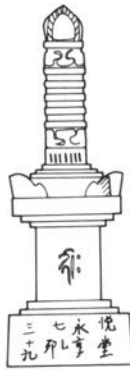
87. 無量光寺塔 (應永二年)



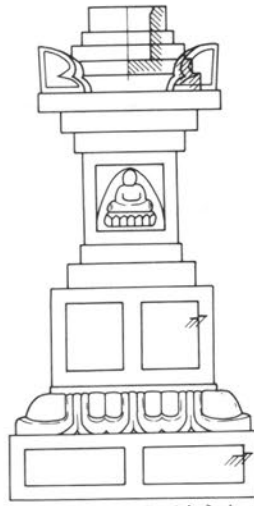
108. 宝勝寺塔
(應永八年)



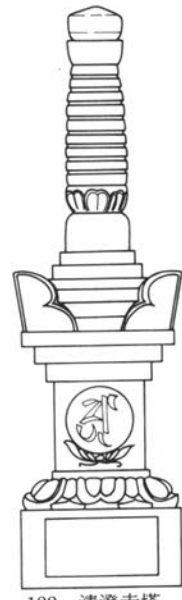
154. 竜淵寺塔
(應永二十七年)



175. 自性院塔
(永亨七卯)



117. 北野神社塔 (応永十二稔)



122. 清澄寺塔
(應永十四年)

第10図 宝篋印塔実測図(8)・(縮尺1/20)

應永十四年三月^廿日』。

塔身は正面に半肉彫の大日如来坐像、他は線刻蓮華座上月輪に胎藏界四仏の種子を刻出する。笠は下二段上六段で隅飾は二弧で各面輪郭を巻く。相輪は形状の整った宝珠、二重に蓮弁を刻む請花、無文の伏鉢をもつ。

これらの宝篋印塔は、在地の蛇紋岩を用いた室町時代前期の代表的な石塔である。

(6) 竜淵寺塔 (第10図154)

同型式の石塔が三基あるが、ともに装飾は顕著である。

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、内面素面、上面は線刻による単弁四葉を配し、隅も単弁を刻出する。

基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ち、内面に『應永二十七年』と刻む。塔身は輪郭を巻く。笠は下二段上四段で最上段は輪郭にて二区に分ち露盤とする。上面には径7cm、深さ3.5cmの柄穴を穿つ。隅飾は軒から斜めに外反し、背は球状を示す。側面は輪郭を巻き、茨は外側に巻く・相輪はかなり太く、どっしりしている。

(7) 自性院塔 (第10図175、図版8、175)

総高96cmを測る緑泥片岩製の石塔。

基礎は上面二段の段形式で、正面の側面には『悦堂「永享」七^ノ月「三十九」』と銘文が確認される。他の三面は素面。

塔身の各面には金剛界四仏の種子を刻む。笠は下二段上四段で、隅飾は石材の関係で四弁とも変則形であるが、二弧素面で外反する。相輪は四角柱状で、宝珠は四方に火焰を刻み、請花は意匠文を刻み、露盤には縦連子を刻出している。

(8) 長林寺塔 (図版8、192)

基礎は上面二段の段形式で、側面を輪郭にて二区に分ち。正面には『奉建立□□』為□□』文明×年三月一日』と刻む。

塔身は縦13cmの月輪を掘り窪め、内面に金剛界四仏の種子を刻出する。

笠は下二段上四段で、最上段には縦連子を刻む。上面には径7.5cm、深さ4.5cmの柄穴を穿つ。隅飾は輪郭をもち、茨は側面いっぱいならせん状に巻く。相輪は三輪以上を欠損。無文の伏鉢、線刻の蓮弁を刻む請花を認める。

(9) 円福寺塔

基礎は上面二段の段形式で線刻による輪郭を巻き、正面には『勝敵殿』、左側面には『長亨三季^三』と刻む。

塔身は各面月輪内に胎藏界四仏の種子を刻出する。笠は下二段上四段、隅飾は欠損している。

(10) 大見寺塔 (第12図198、図版9、198)



第11図 無量光寺塔(左より、康永三年、應永廿一年、康安元年、至徳廿二季)

前述の徳治三年銘の塔近くにある。塔身は別材。

反花座は側面を輪郭で二区に分ち、上面には複弁三葉を配し隅も複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分かつ。内部には次の銘文がある。正面『相劬』足下」郡□』酒匂』、左側面『卿為』小嶋』行西』也天』、背面『文廿一□年』四月日』孝子啓』、右側面『南無阿』弥陀佛』三尊海』曾諸主』。

笠は下二段上五段で、最上段は側面輪郭にて二区に分ち露盤としている。また、径12cm、深さ8cmの柄穴が穿たれている。

相輪は伏鉢が欠損している。宝珠は円筒形、上の請花は花卉を示すが下部の請花は高さをもたずやや様式化している。

(11) 正竜寺塔 (図版9、200、208)

ともに保存庫に収蔵され、細部は調査できなかったが型的には全く同じである。

基礎は上二段の段形式で、側面は輪郭を巻く。左右に頭部山形にした短冊を彫り窪め内部に紀銘を施す。なお、左側に紀年銘を確認する。

塔身は月輪内に胎藏界四仏種子を刻む。笠は下二段上三段、段形側面には縦連子を施している。隅飾は軒より斜めに外反し、側面には茨が差く。

相輪は伏鉢の直径が笠の段形幅より大きいことなどから別材と思われるが、様式的にはほぼ同時代のものと考えられる。やや押し潰された形の宝珠、逆円錐形で鋸歯文を施した請花、線刻の蓮弁を認める伏鉢などが特徴である。

(12) 円満寺塔 (第12図202)

反花座は側面素面、上面には複弁四葉を配する。基礎は上面二段の段形式で輪郭上に『天文十六年』今月今日』、また、内面に『為阿闍梨』逆』修』と刻む。塔身は各面線刻の月輪内に胎蔵界四仏の種子を配す。

笠は下二段上六段、隅飾は馬耳状に上面で外反し、二弧で各面素面である。上面には上径9cm、下径7cm、深さ8.5cmの柄穴を穿つ。

(13) 芳林寺塔 (第12図、210、図版9、210)

岩付城主太田氏資の供養塔と伝えられている。

塔高114cmで3尺8寸塔、台座を含め5材による構成である。

基礎は上面二段の段形式で、側面中央に月輪を彫り、各面に顕教四方仏種子を刻む。正面左右に頭部山形にした短冊を彫り、まず右側に『當寺』開基』昌安道也』神祇』居士』、左側『永禄十一年八月二五日』と刻む。

塔身は輪郭をもち、胎蔵界四仏の種子を刻む。笠は下二段上三段で軒中央に条線3本、上段二段目に意匠化した重菱形文、最上段には12本の縦連子を刻む。隅飾は軒から外反し、一弧で茨が外側に巻く。相輪は円錐形を示す宝珠、鋸歯文を刻む請花、線刻の九輪、蓮弁を線刻する伏鉢を認める。

軟質の凝灰岩を用いた装飾豊かな室町時代後期の代表的な石塔である。

4. 無銘の宝篋印塔

(1) 宝篋山塔 (第13図1、図版10、1)

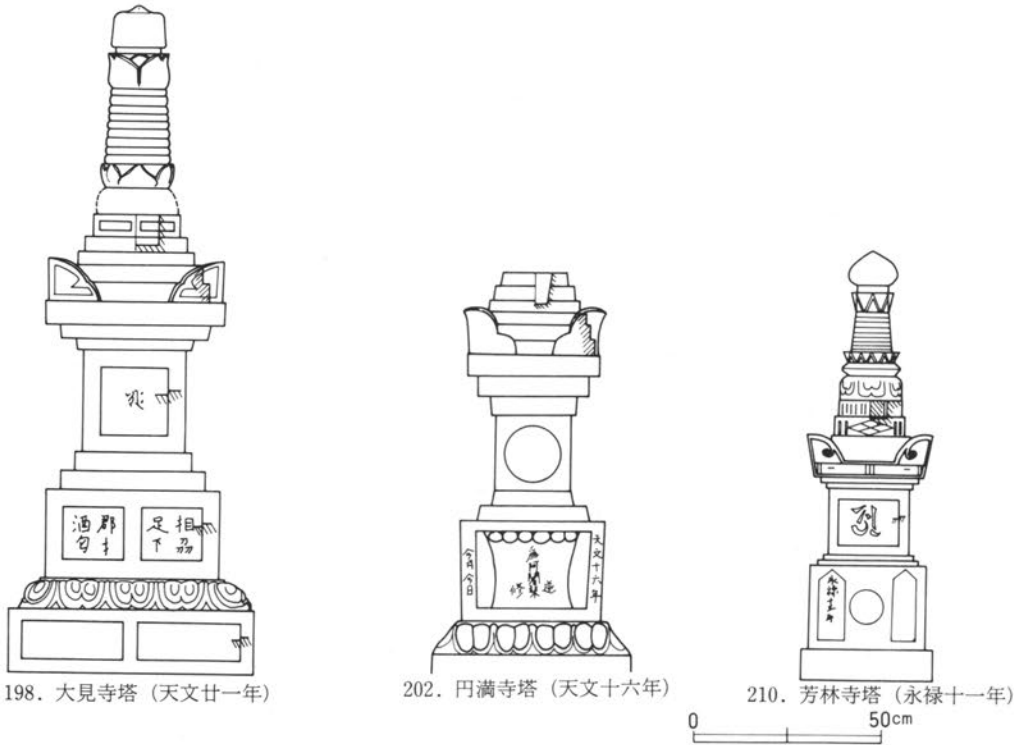
筑波山系の宝篋山山頂にある。

花崗岩製で基礎は3材(側面2、反花1)、笠は2材(下段・軒上)、塔身、相輪各1材の7材構成であったと思われる。

基礎から笠上面まで198.0cmを測るところから完存ならば300cmの石塔であったと推察される。

基礎は側面に輪郭をもち、内部は素面、反花は方形座上に複弁二葉を刻出し、隅も複弁の反花を配する。塔身は各面輪郭をもち、風化しているが蓮華座上に二重光背形に彫り込み、坐像を刻出している。彫り込みの深さは頭上部で2cm、首で1.5cm、胴下は輪郭の彫り込み深さと一致する。

笠は軒幅で90cmを測り、基礎の幅より8cm大きいため不安定に思われるが、視覚的には重厚



第12図 宝篋印塔実測図(9)・(縮尺1/20)

さをもつ。下三段上七段で最上段を輪郭にて二区に分け露盤としている。隅飾は二弧素面で、側面が直立しどっしりしている。

この塔は早期宝篋印塔のひとつと考えられ、鎌倉時代中期の弘長頃(田岡1972)の建立と推察されている。

(2) 清厳寺塔(第13図2、3、図版10、2、3)

清厳寺は宇都宮市千波町にある寺院で、境内には重要文化財の阿弥陀三尊鉄製碑伝がある。

石塔は墓地内に並列してあり、ともに反花座、基礎、塔身、相輪の五材構成であるが、相輪は別材である。

両塔とも反花座は輪郭にて側面二区に分ち、格狭間を刻む。反花は複弁三葉で隅も複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、輪郭にて側面二区に分ち。塔身は右塔(第13図2)が二重輪郭内に金剛界種子を葉研彫りしている。左塔(第13図3)は各面輪郭内に径17.5cmの月輪を線刻し、内部に金剛界四仏の種子を刻む。しかし、その字画の幅は狭く彫りは浅く拙劣な感じが強い。

笠はともに下二段上五段で、最上段を輪郭にて二区に分ち露盤とする。隅飾は輪郭付二弧で、右塔はかなり外反する。

右塔は丸味を帯びた深い彫りを示す複弁や、塔身の断面正三角形形状に力強く葉研彫りされた種子の特徴から、鎌倉後期、また、左塔は反花座の蓬弁の彫りがやや条線化しており、立体観を欠き、また、塔身の拙劣な種子の彫りなどから、南北朝期の造立と思われる。

(3) 冷泉為相塔（第13図4、図版10、4）

鎌倉市の浄光明寺裏山の石段の上にある。

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、内面に格狭間を刻む。格狭間はきわめて丸味をもち、安定した形を示す。上面は複弁二葉を配し隅も複弁を刻出する。基礎は上面二段の段形式で、側面は輪郭にて二区に分ち。塔身も輪郭を巻き素面。笠は下二段上五段で最上段は輪郭を巻き二区に分ち露盤とする。隅飾は外反し、二弧で各面輪郭を巻く。

全体的には南北朝時代前期の様相をもつ。

(4) 普賢寺塔（第13図、5、6、図版11、1）

普賢寺塔についてはすでに紹介しているが再び考えてみたい（齋木1983b）。

二塔とも様式的には全く同じで、反花座の側面は格狭間入二区。基礎は上面二段で、側面は輪郭にて二区に分ち。塔身も輪郭付素面。笠は下二段上五段で、最上段は輪郭にて二区に分ち。隅飾はやや外反し、二弧で各面輪郭をもつ。

5は鎌倉後期、6は南北朝中期と考えられるが、その根拠は各計測値の比率もさることながら、例えば反花座側面の格狭間の形状、また、上面の反花の複弁四葉、複弁三葉の形状などが特徴となる。

(5) 医王寺塔（第14図1、2）

二塔とも、栃木県指定文化財であり医王寺本堂左奥の墓地内にある。

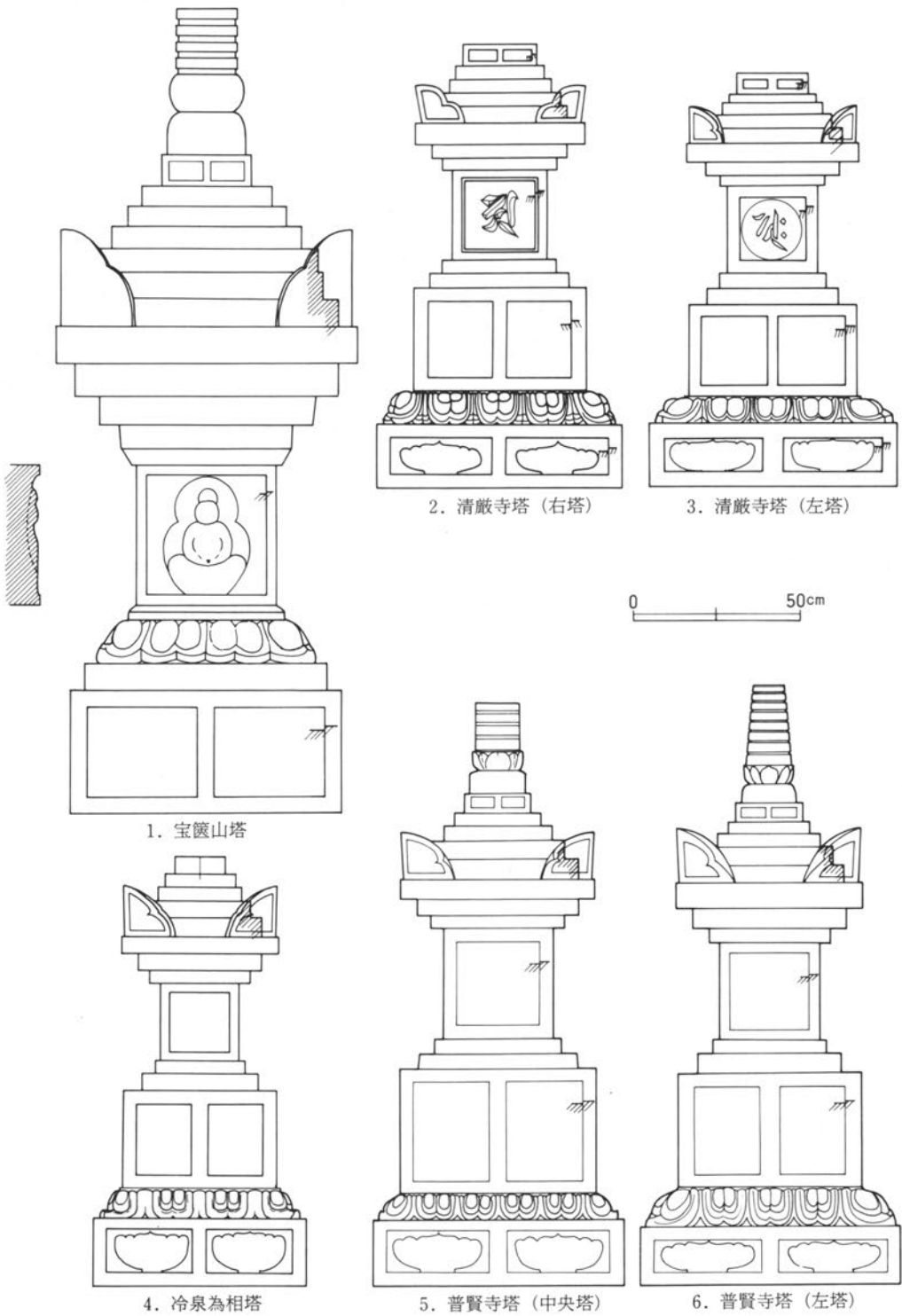
1の反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、内部素面、反花は複弁五葉を刻出する。基礎は上面二段の段形式で側面を輪郭で二区に分け、内面は素面。塔身は各面に月輪を線刻し、内に金剛界四仏の種子を配す。笠は下二段上五段で、最上段は輪郭で二区に分け露盤とする。隅飾は直立に近く、二弧で輪郭をもつ。

2の反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、内部には格狭間を刻む。反花は複弁二葉を配し、隅も複弁の反花を刻出する。基礎は側面を輪郭にて二区に分ち素面。塔身は各面中央にきわめて小さく金剛界四仏の種子を刻む。なお、塔身の材質だけ、他の部材と異なるところから混在していると思われる。

笠は下二段上五段で前者と同様に最上段を輪郭にて二分し露盤としている。隅飾はやや外反し、二弧で輪郭をもつ。ともに安山岩製。

(6) 願成寺塔（第14図3、図版11、2）

反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、それぞれ格狭間を刻む。格狭間は背が低く、左右各



第13図 宝篋印塔実測図(10)・(縮尺1/20)

2個の茨は端寄りで肩は高いが側線はふくらむ。上には複弁二葉を配し、隅も複弁の反花を刻出している。

笠は下二段上四段で、上面には径6cm、深さ5cmの柄穴を穿つ。隅飾は直立し三弧、背面を除く三面は輪郭を巻き、内に月輪を、肉彫りしている。背面のみ輪郭も月輪も線刻。笠材の下二段上四段、隅飾の月輪付三弧の様式は、北関東地方に多数造立されている重層宝篋印塔（日野1970a）の様式であり、また、渋川市金蔵寺塔（川勝1978）、中之条町宗本寺塔（川勝1978）に近似しているところから南北朝時代前期の重層宝篋印塔の笠材と思われる。

(7) 安楽寺塔（第14図4、図版11、3）

この石塔の所在を知ったのは、寺崎義雄『図説、常総の文化財』1971からであった。至急訪ねるときわめて特異な塔であることがわかった。そうこうするうちに二氏により論考が発表された。まず、千々和到はその造立年代を鎌倉時代末期（千々和他1984）とし、鈴木道也は室町時代をさほど遡るものではないとした（鈴木1984）。

塔は安楽寺域内に建ち「平国香」供養塔と伝えられている。

基礎は上面五段の段形式で側面を輪郭で二区に分ち、格狭間を刻む。塔身も輪郭をもち、各面に金剛界種子を刻むがその種子の彫法は浅く、端正さに欠く。また、幅に比べきわめて背が低い。

笠は下五段上八段で軒反りしている。隅飾はきわめて磨滅しているので判断できないが一弧と思われる。笠の最上段の一辺が36cmであるのに対し、相輪、伏鉢の径が27.7cmであるから、相輪は別材の可能性が高い。

この石塔の時代を推定すると、

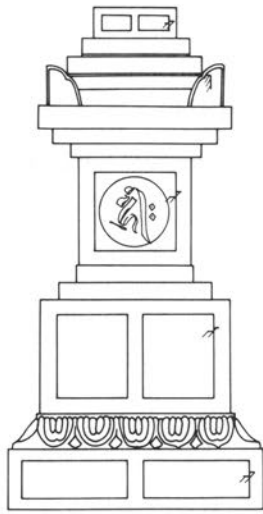
- ① 塔身の高さとの比が、1対0.86を示し背が低い。
- ② 種子の彫りが小さく、また弱い。
- ③ 軒が反転している。
- ④ 基礎上五段、笠下五段上八段である。

などから室町時代中期以降の石塔と思われる。

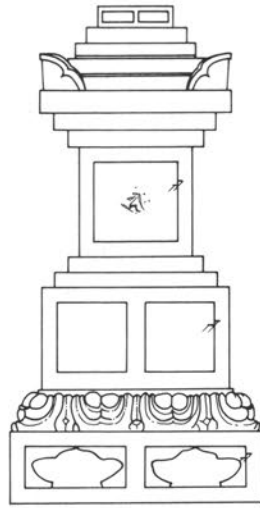
(8) 恵日寺塔（第14図5、6 図版11、4）

前述の安楽寺塔を考える意味で、福島県の猪苗代湖畔、恵日寺所在の軒反り宝篋印塔を紹介する。

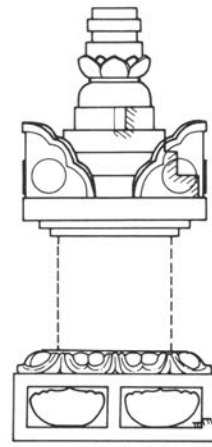
反花座は側面素面。反花は複弁二葉を配し隅も複弁の反花を刻出する。全体的に肉厚で丸味をもつ。基礎は上面二段の段形式で、各面素面。塔身は基礎、笠に比べ小さい。笠は下四段上四段で軒反りしている。隅飾は石材の関係でか歪んでいる。一弧であるが輪郭をまわし、茨が内側に巻く。露盤は輪郭で二区に分ける。



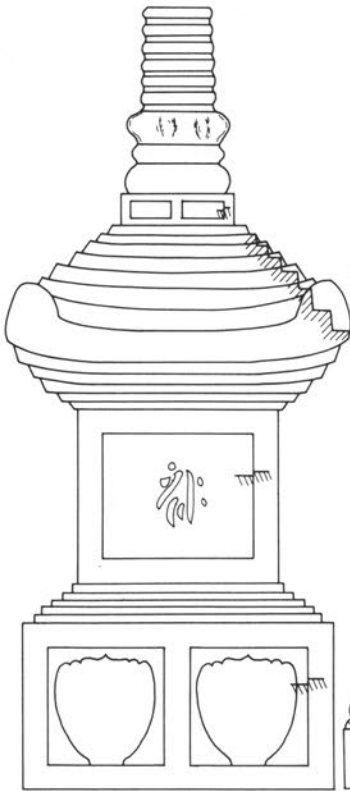
1. 医王寺塔



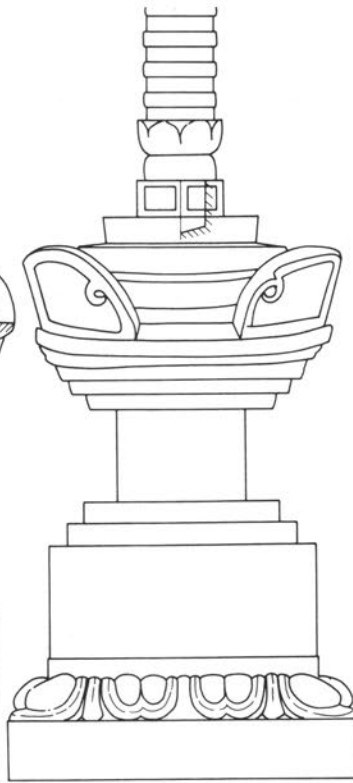
2. 医王寺塔



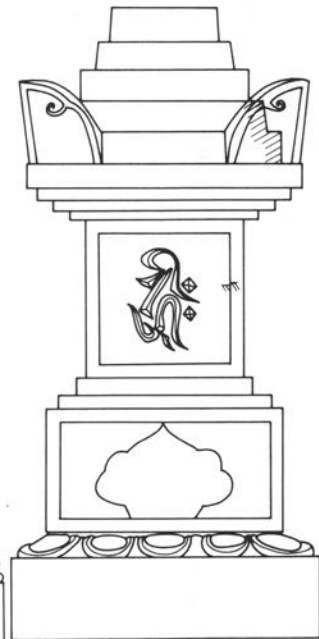
3. 願成寺塔



4. 安楽寺塔



5. 恵日寺塔



6. 恵日寺乘円坊塔

第14図 宝篋印塔実測図(11)・(縮尺1/20)

また、近くに「乗円坊」の墓塔と伝えられている宝篋印塔がある。

計測値や石材の表面観察により、基礎・塔身、笠は同一塔と思われるが、反花座と相輪の別材の可能性が強い。基礎は上面二段の段形式で輪郭を設け、宝珠の格狭間を刻む。塔身は輪郭をもち、四仏の種子を葉研状に刻む。笠は下三段上五段で隅飾は一弧で輪郭をもち、茨が外側に巻く。

両塔とも室町時代の中期以降のもので、地方的な様相をもつものと理解される。

IV. 考 察

1. 分 布

文禄年間までの紀年銘がある235基の宝篋印塔と、第3表に示した無銘の宝篋印塔の所在地を図化したものが第15図である。いわゆる関東型式宝篋印塔を■で示し、基礎が反花式のもの□にて示した。

旧国別にみていくと、まず注目すべき相模は箱根山中、あるいは小田原周辺に初発期の宝篋印塔が確認されることは当時の宗教活動を示す事象として如実に示されている。また、鎌倉幕府の中心になった鎌倉は特に稠密な造立を認めることは当然のことであろう。相模中央部からは現在まで中世の宝篋印塔は確認されておらず空白地帯となっているが、特に注意されるべき地域と思われる。

甲斐は東部地域から壇上積型式の宝篋印塔が多く認められている。また、信濃の東部地域には数基の宝篋印塔が確認されており、多くが壇上積型式を示している。

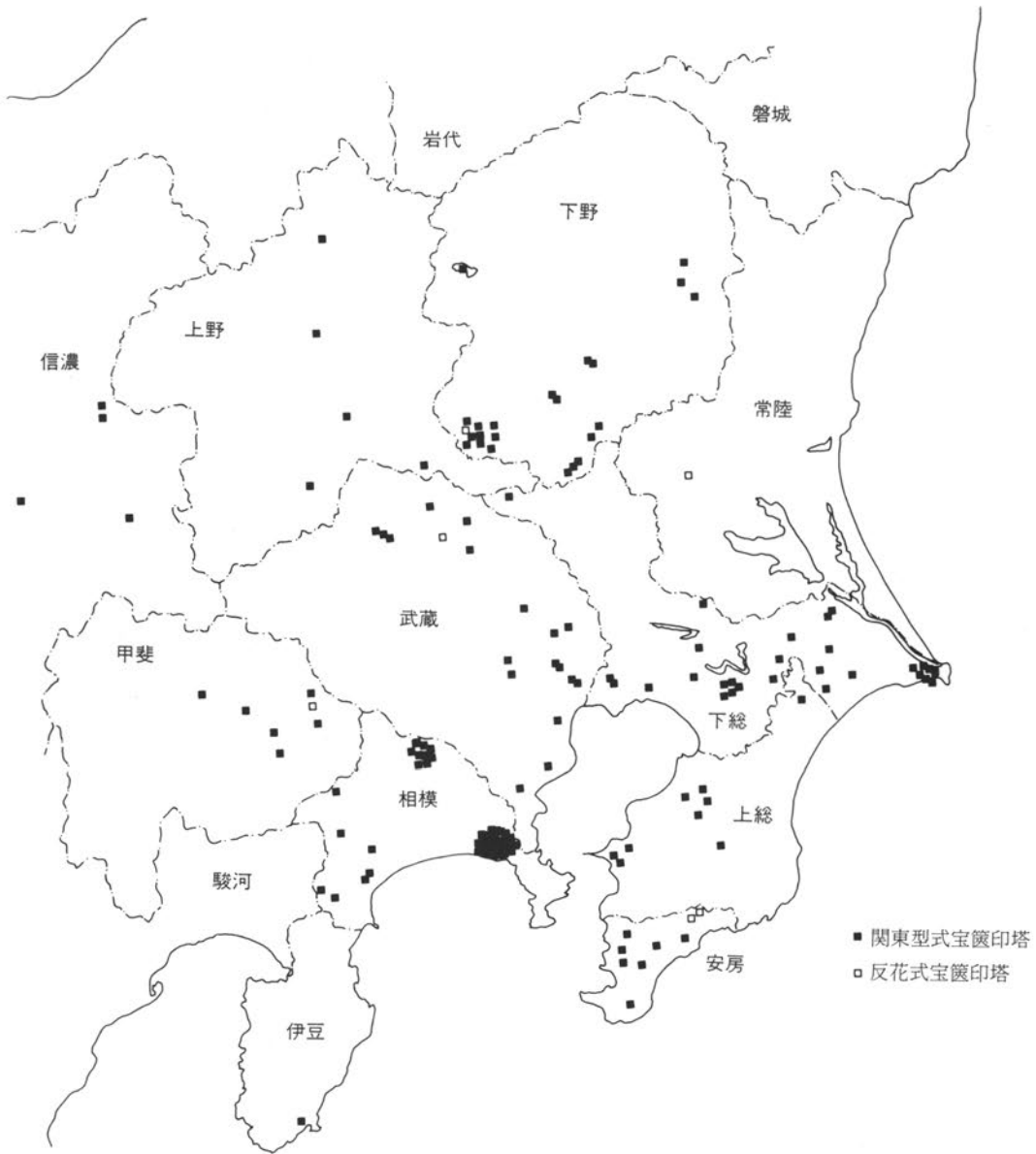
上野はまだ数基のみの確認であるが、榛名山麓、赤城山麓には数多くの宝篋印塔がある（群馬県1984）。また、笠塔婆、宝塔など多くの石塔の造立でもわかることではあるが豊富な石材を利用して隆盛をほこった石造文化圏であることがわかる。

下野は、室町幕府の足利氏の関係で足利に特に造立されている。その他の地域は散在している状況である。また、日光中禅寺湖内の上野島に「康永二年」銘の宝篋印塔があることは大変興味深い。

常陸は筑波山系の宝篋山山頂で早期宝篋印塔が発見されていることを考えれば、もっと発見されてよい地域と思われる。事実、小松寺（東茨城郡常北町）や清音寺（同）などで、近年確認されている。

武蔵は西部地域よりも、東部地域の平野部に多い。また、同地域に数多く建立されている板碑との関係も無視できない。

下総、上総、安房については県下全域の金石文調査によりほぼ全域を捉えられた地域である。



第15図 宝篋印塔分布図

ただ応永年間以降のものが主体を占める。

2. 造立数の変遷

紀年銘が判明している235基の宝篋印塔を10年毎に区切り、表示したのが第16図である。

下に示した時代区分は田岡香逸（1976）の時代区分による。

造立数の変遷を全体的にみると増減する大きな区切りが認められる。まず、それに着目してみると、1329（元徳元）年から1334（建武元）年頃の増加、1350（観応元）年から1369（長慶二）年頃の増加、1370（長慶三）年から1376（永和二）年頃の減少、1381（永徳元）年から1400（応永七）年頃の増加、1410（応永十七）年から1460（寛正元）年頃の減少が指摘できる。また、造塔の最も盛んな時期は1390年代の明德、応永年代になることがひとつの目安になるだろう。

このように造塔数の推移をみると、次のように五つの時代区分が示される。

- ① 石製宝篋印塔の塔形の完成した鎌倉時代後期
- ② 造立数の横ばいを示す南北朝時代前・中期
- ③ 宝篋印塔の塔形の隆盛期にあたる南北朝時代後期から室町時代前期前半期
- ④ 造立数のきわめて少ない室町時代中期
- ⑤ 近世宝篋印塔萌芽期の室町時代後期

また、時代的な増減と関東型式宝篋印塔の分布をみると鎌倉時代後期では造立数23基のうち、相模15基、武蔵6基、信濃、上総各1基であり、相模にいかにも偏在していることがわかる。

南北朝時代になると総基数は55基となり、鎌倉時代のほぼ2倍の造立となる。地域的にみると、相模（鎌倉市内）の18基、下野の13基が多い。

室町時代は全般より、造塔の多い応永年間の34年間をみてみると、造立された89基のうち、相模（鎌倉市内）62基、武蔵10基、下総6基、上総、下野各4基、安房3基となり、この時代も相模での造立が多いことが指摘できる。

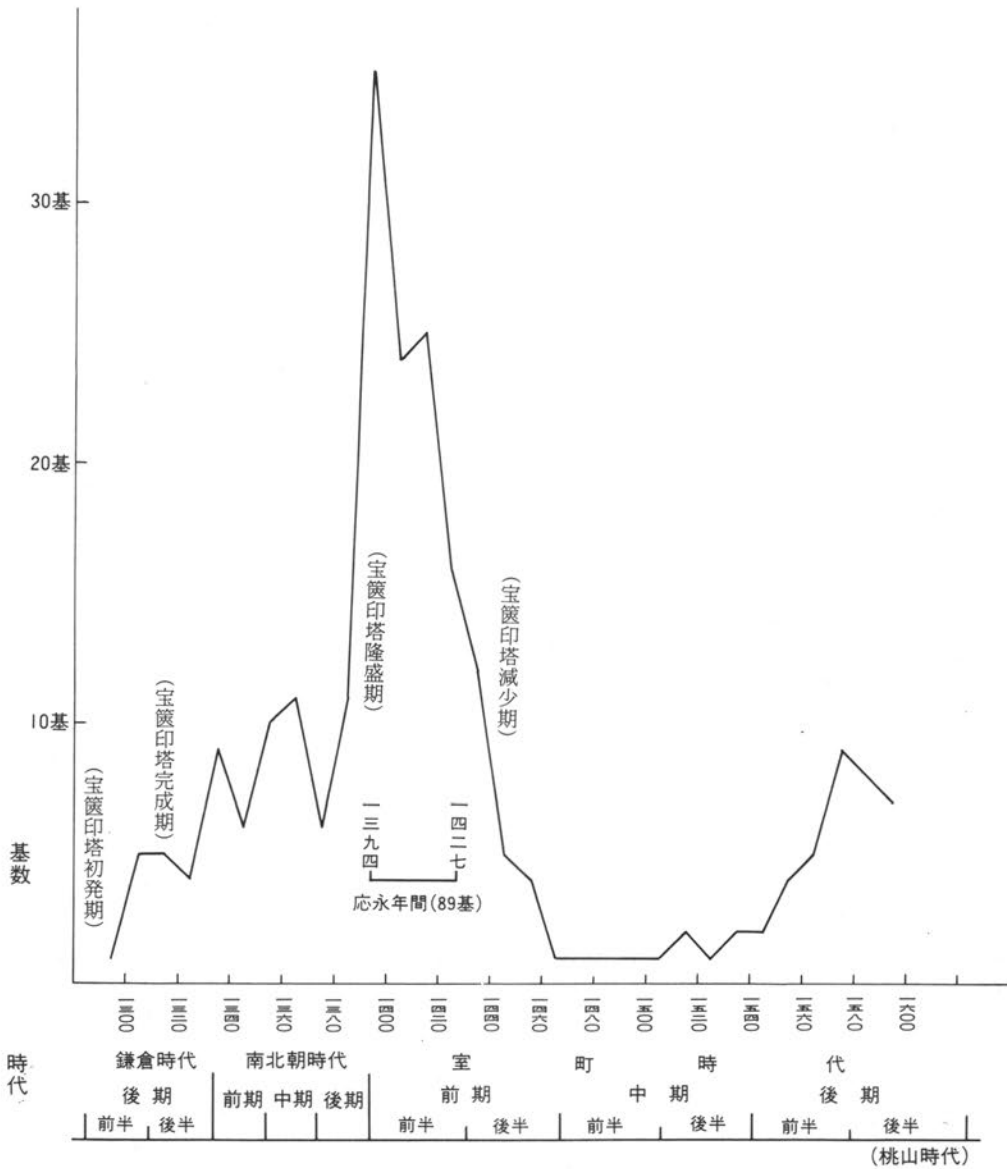
3. 各時代の様式的変遷

鎌倉時代後期前半に該当する石塔をみると、大きくふたつに分けられる。まず、基礎上面の段形が三段と二段、笠の段形が下三段上七段と下二段上五段、隅飾が素面二弧と輪郭付二弧で各々、前者が古く、後者は新しい様式である。反花座は箱根山塔を除く四塔にあり、すべて側面を輪郭にて二区に分ち、余見塔を除く三塔には格狭間があり、また、上面の複弁は二～五弁ある。

鎌倉時代後期になると様式的にも安定する。反花座は側面を輪郭にて二区に分ち格狭間を刻む。上面は複弁、三～五弁が多い。基礎は上面二段がほとんどである。笠は下二段上五段が多く、また、下二段上四段、同七段もある。

箱根の興福院塔は鎌倉時代後期であるが、基礎は上面三段、側面一区であり、笠は下三段上七段であることから、この地域の初発期宝篋印塔群の影響を受けていることがわかる。

南北朝時代前期は、中形塔（田岡1976）が多くなる。反花座は側面二区で素面、上面は複弁二葉、基礎は上面二段が一般化する。塔身は輪郭を巻き、金剛界四仏種子等を刻む。笠は下段



第16図 宝篋印塔造立数変遷図

形は二段のみであるが、上段形は三、四、五、六各段を認める。また、最上段を輪郭にて二区に分ち露盤とするものもある。

信濃、甲斐の中部地域には基礎を壇上積にした型式が確認される。

南北朝時代中期になるといわゆる四尺前後の小形塔も出現する。反花座は側面を輪郭にて二区に分ち、内面は素面、上面に複弁を配する。基礎は上面二段で側面は輪郭にて二区に分ける。塔身は輪郭を巻く。笠は下二段上四段、あるいは五段が一般化する。

南北朝時代後期になると、中期からの様式はそのまま踏襲されていく。すなわち、反花座は

側面輪郭にて二区に分かち、上面は複弁二葉、基礎は上面二段、側面を輪郭にて二区、笠は下二段上五段に安定する。隅飾は輪郭付二弧である。

室町時代前期になると爆発的に数は増すが小形塔が多くなり、各部の手法が退化していく。ほとんど前代の様式を踏襲しているが、自性院塔のごとく緑泥片岩を用い、また、相輪宝珠に火焰を刻むような特異な石塔も出現するようになる。

室町時代中期は、急激に基数が減り、現在確認されているのは部分材を

含め9基という少なさである。様式的には前代からの踏襲であり、時代的特徴としては特にな
ない。この時期に利根川下流域に地元産出の砂岩を用いた地方型式宝篋印塔の発生が確認されて
いる。
(註5)

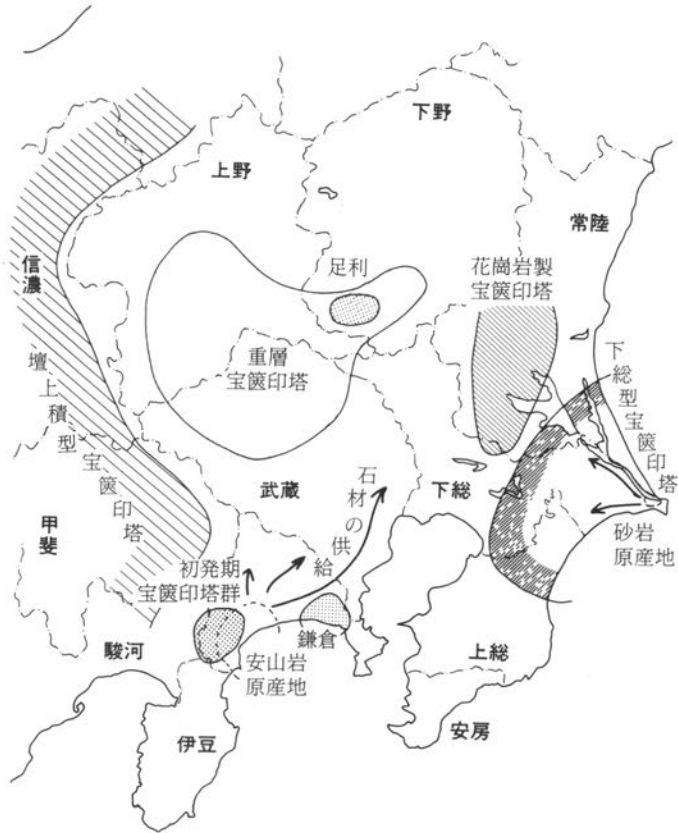
室町時代後期になると砂岩あるいは凝灰岩を用いた装飾宝篋印塔が出現する。特に部分材として反花座が退化し、方形の台座になる。その他隅飾の外反が強くなる相輪への装飾が著しくなる。

室町時代後期後半になると安山岩製の大型装飾宝篋印塔が出現する。

4. 計測値よりみた時代的特徴

細部にわたって各宝篋印塔を計測してみると各時代の特徴が如実に示されてくる。

赤星直忠は総高に対する相輪高の比率をみたり(赤星1959)、田岡香逸は各部材の比率、たとえば、反花座の側面の高さに対する幅の比率、基礎の側面の高さに対する幅の比率、塔身の幅に対する高さの比率、笠の全体の高さに対する軒幅の比率などを示すことにより、整備型式か



第17図 関東型式宝篋印塔分布圏

第1表 関東型式宝篋印塔基礎幅に対する各部比率

時代区分		各 部 分	反 花 座		基 礎		塔 身		笠		相 輪
			高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	軒幅	高さ
鎌倉時代	後期前	1285~1308	0.39	1.39	0.68	1.00	0.54	0.53	0.67	0.96	—
	後期後	1309~1333	0.51	1.39	0.62	1.00	0.56	0.54	0.75	1.01	0.98
南北朝時代	前期	1334~1354	0.33	1.33	0.60	1.00	0.54	0.53	0.62	1.02	1.09
	中期	1355~1374	0.35	1.42	0.51	1.00	0.52	0.52	0.68	1.01	1.16
	後期	1375~1392	0.34	1.54	0.51	1.00	0.58	0.58	0.76	1.05	1.20
室町時代	前期	1393~1466	0.59	1.49	0.65	1.00	0.55	0.58	0.80	1.05	1.41
	中期	1467~1541	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	後期	1542~1614	0.38	1.29	0.75	1.00	0.74	0.68	0.83	0.97	—
江戸時代	(元和)	1615~1623	0.41	1.39	0.86	1.00	0.76	0.66	0.91	0.86	1.65

退化型式かを判断し、時代のひとつの傍証としている。

ここで第1表として示したのは、石塔全体に関しての比率値を測り、その値を比較したものである。基本的には田岡香逸の指摘した基礎の幅の3倍値が石塔の総高に一致するという点に着目したのである(田岡1978)。つまり、石塔の構成要素として基礎は重要な部分なので、この基礎幅の計測値に対して他の部分の計測値の比率を求めてみた。なお、反花座及び基礎は反花、段形の部分は含まず側面高を用いた。

反花座の高さは基礎の幅に比べ鎌倉時代後期前半では0.39、同後半では0.51を示し、南北朝時代前期にかけて低くなる。つまり背が低くなるということである。その後室町時代前期にかけて比率は高くなるが、室町時代後期には再び低くなる。同じ様相は幅の比率に関しても指摘されるが、室町時代前期には比率は低くなる。

基礎の側面の高さは、幅に対して鎌倉時代後期から南北朝時代後期にかけて低くなっている。南北朝時代後期から室町、桃山、江戸時代にかけては比率が高くなり、したがって高さをもつようになる。

塔身の高さ、幅ともに室町時代前期まで0.52から0.58を示す。各塔基礎幅に対する塔身の高さ及び幅は略々2分の1が多い。桃山時代は、高さ、幅とも大きくなっていくことがわかる。

笠の高さは鎌倉時代後期では0.67、0.75を示すが南北朝時代前期に一時低い比率となり、その後高い比率を示していく。軒幅は鎌倉時代後期前半で基礎幅より小さかったが、その後の室町時代前期にかけて大きくなり、また、室町時代後期、江戸時代(元和期)では基礎の幅に対して小さくなる結果が示されている。

相輪は遺存する資料が少ないので、明確な平均比率は示せ得ない。ただ、鎌倉時代後期では0.98とほぼ基礎幅に近い数値であったものが南北朝、室町時代を経て江戸時代に至るに従い、

相輪の高さが大きくなることが示される。

V. おわりに

宝篋印塔に記された銘文をみると内容が大きく四つに分けられる。まず、願文、これは塔を造立した意味を記すものである。紀年銘は石塔の造立した年月日、願主はこの本願を起こした人名、そしてその石塔の製作者を大工として記す場合もある。

宝篋印塔は願文から追善供養塔、逆修塔、墓塔の三つに分けられる。しかし多くは追善供養塔である。つまり、造立者がある特定の人を供養するために行うもの、また、塔を建てるのがすなわち功德であり、造立者まで徳が及ぶというのである。

逆修塔とは生きている間に自分のために死後の法要を営み、そのための塔を造立することである。たとえば、京徳観音塔（延文六年銘）、東光寺塔（應安二年銘）、光明寺塔（應安二年銘）には逆修と刻まれており、また「法界平等利益仍逆修」と刻む、西方寺跡塔（永和五年銘）、「来苦報逆修滅後善根」と刻む浄妙寺塔（明德三年銘）などもこの類である。

墓塔として造立されたものには、覚園寺塔（正慶元年銘）、安竜寺塔（元徳三年銘）、芳林寺塔（永禄十一年銘）などが確認される。

銘文が確認されるのは限られており、種子や年月日だけが刻銘されたものや全く無銘のものも多い。したがって、何々の為として造立したことより、自分の行為として建てることに主眼をおいていたことも多かったのではないかと思われる。宝篋印塔に紀銘が残されていなくても、それぞれ造立の願いがあり、願主者がおり、造立した時があったのだろう。

最後に、本稿を起こすにあたり多くの人々の協力があつたことを付記したい。今回は特に宝篋印塔の実測に多くの時間を費したが、その調査に心良く応じてくれた各所有者の方々には心よりお礼申しあげたい。また、機会あるごとに文献等をお送りいただき、特に龍ヶ崎市安楽寺塔に関して貴重な御教示をいただいた田岡香逸氏の学恩には感謝の気持ちが絶えない。文献については、また、財団法人文化財建造物保存技術協会の日塔和彦氏にお世話になった。

挿図等の作成においては多大なる御協力をいただいた、栗田則久氏、吉岡弘子氏にお礼申しあげる。

註

1. 「関東形式」という名称は概念上まちがっているのではないだろうか。「形式」とは地域や時代を越えた形態を示す言葉であり、五輪塔形式、宝篋印塔形式、層塔形式などの用語として成立つ。一方、「型式」とはいくつかの物体に共通してある属性により分類されることで、たとえば、関東型式宝篋印塔、関西型式宝篋印塔という名称が成立するのである。したがって本稿では「関東型式宝篋印塔」として、「関東形式」とする場合は、研究史の中で原典を尊重する場合のみとする。
2. 笠の部分を目指す。
3. 基礎の部分を目指す。
4. これは基礎幅からみた各部計測値の比率からも指摘できる。すなわち、反花座幅94cm、反花座側面高27.5cm、基礎幅66cm、基礎側面高42cm、塔身幅及び高さ36.5cm、笠軒幅68cm、笠総高58cm、相輪高96cmを測るが比率をみると次表のようになる。

反花座		基礎		塔身		笠		相輪
高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	軒幅	高さ
0.41	1.42	0.63	1.00	0.55	0.55	(0.88)	(1.03)	(1.45)

したがってこれを第1表、関東型式宝篋印塔基礎幅に対する各部比率よりみてみると、反花座は室町時代より南北朝時代中期の値に近く、基礎の0.63は南北朝時代前期の0.60、あるいは室町時代前期の0.65に近い。塔身は時代を特に限定できない。また、笠、相輪の計測比率は一定性がないことから別材であることが指摘できる。

5. 東京都下の青梅市、五日市町地方にも伊奈石と呼ばれる砂岩を用いた宝篋印塔等石塔群がある。

参考文献

- 赤星直忠 1935 「上杉憲方の逆修塔」『考古学雑誌』第25巻第9号
- 赤星直忠 1937 「鎌倉の寶篋印塔」『考古学』第8巻第3号
- 赤星直忠 1938 「多寶寺覺賢塔について」『考古学』第9巻第11号
- 赤星直忠 1959 「鎌倉の石造建造物」『鎌倉市史考古編』
- 赤星直忠 1962 「箱根塔の沢、阿弥陀寺洞窟内の石造塔婆」『神奈川県文化財調査報告』27集。
- 赤星直忠 1967 「石造墓塔」『日本の考古学』VII, 歴史時代(下)
- 赤星直忠 1969 『箱根町誌』第1巻
- 赤星直忠 1971 「東昌寺石造塔婆」逗子市文化財調査報告書第二集
- 跡部直治 1928 「覚園寺の寶篋印塔について」『考古学雑誌』第18巻第9号
- 跡部直治 1928 a 「鎌倉の寶篋印塔」『史蹟名勝天然紀念物』3—8
- 跡部直治 1928 b 「鎌倉の寶篋印塔」(二)『史蹟名勝天然紀念物』3—9
- 跡部直治 1928 c 「鎌倉の寶篋印塔」(三)『史蹟名勝天然紀念物』3—11
- 跡部直治 1970 「寶篋印塔」『仏教考古学講座』第2巻, 塔婆編
- 阿部圭佑 1978 「余見の寶篋印塔に就いて」
- 石田茂作 1969 『日本佛塔の研究』講談社

関東型式宝篋印塔の研究

- 伊原恵司 1966 『重要文化財覚園寺開山塔，大燈塔修理工事報告書』
- 植松又次 1978 『甲斐の石造美術』甲斐新書2
- 小野正文 1984 「棲雲寺出土の常滑大甕」『丘陵』第10号
- 川勝政太郎 1936 a 「宝篋印塔に於ける関西形式，関東形式」『考古学雑誌』第26巻第5号
- 川勝政太郎 1936 b 「寶篋印塔式の笠部手法について」『考古学雑誌』第26巻第9号
- 川勝政太郎 1937 「石塔に於ける四佛に就いて」『考古学』第8巻第1号
- 川勝政太郎 1939 a 『石造美術』一條書房
- 川勝政太郎 1939 b 「宝篋印塔の形式の進展」『史迹と美術』第9巻第12号
- 川勝政太郎 1957 『日本石材工芸史』綜芸舎
- 川勝政太郎 1960 「関東形式宝篋印塔の成立」『鎌倉』第4号
- 川勝政太郎 1974 「大蔵派石大工と関係遺品」『史迹と美術』第449号
- 川勝政太郎 1978 『日本石造美術辞典』東京堂
- 群馬県教育委員会 1984 『群馬県文化財便覧』昭和58年度版
- 庚申懇話会 1976 『日本石仏事典』雄山閣
- 斎木 勝 1980 「房総宝篋印塔考」『物質文化』35
- 斎木 勝 1983 a 「補遺「房総宝篋印塔考」」『貝塚』31
- 斎木 勝 1983 b 「東京の宝篋印塔」『歴史考古学』第12号
- 斎木 勝 1984 「近世の宝篋印塔—佐原市観福寺塔，市原市龍溪寺塔」『研究連絡誌』第7・8合併号，千葉県文化財センター
- 齊藤彦司 1969 「朝倉能登守夫人墓石造宝篋印塔の造立年代について」『神奈川県立博物館研究報告』第1巻第2号
- 鈴木公雄他 1983 「港区三田濟海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査概要」東京都港区教育委員会。
- 鈴木道也 1984 「竜ヶ崎市安楽寺宝篋印塔」『史迹と美術』第500号
- 田岡香逸 1972 「続早期宝篋印塔考—常陸宝篋山塔と近江錦織寺塔—」『史迹と美術』第422号
- 田岡香逸 1973 『近江の石造美術』6
- 田岡香逸 1976 『近江の石造美術』3
- 田岡香逸 1978 「但馬の石造美術（前）」『石造美術』第6号
- 田岡香逸 1979 「早期宝篋印塔考(5)」『史迹と美術』第496号
- 千々和到 1984 「茨城県南部の中世金石文資料」『茨城県史研究』第52号
- 坪井良平 1939 「山城木津惣墓標の研究」『考古学』第10巻第6号
- 寺崎義雄 1971 『図説，常総の文化財』
- 富 祐次・中里魚彦 1983 『栃木県の工芸品・書跡考古資料』栃木県教育委員会
- 中西 亨 1984 「新知見の石造宝篋印塔」『史迹と美術』第543号
- 野村 隆 1977 a 「関東形式宝篋印塔の六分類」『史迹と美術』第471号
- 野村 隆 1977 b 「関東形式宝篋印塔の六分類」『史迹と美術』第472号
- 野村 隆 1979 「足利市鶏足寺の石塔」『史迹と美術』第491号
- 野村 隆 1981 「伊派遺品の傾向と大蔵派宝篋印塔」『史迹と美術』第519号

- 野村 隆 1984 「本誌543号中西亨氏「新知見の石造宝篋印塔」の実測図」『史迹と美術』第544号
- 橋瓜 聡 1961 「東山の宝きょう印塔」『群馬文化』第60号
- 畑野経夫 1980 『重要文化財安養院宝篋印塔保存修理工事報告書』
- 日野一郎 1941 「宝篋印塔形式の発達とその地方相」『古代文化』12—8, 9, 10, 11, 12
- 日野一郎 1970 a 「重層宝篋印塔」『東京史談菊池山哉先生追悼号』
- 日野一郎 1970 b 「宝篋印塔」『新版考古学講座』第7巻, 有史文化〈下〉
- 日野一郎 1976 「日本各地の仏塔—関東—」『新版仏教考古学講座』第3巻
- 平野元三郎 1934 「上千葉及び三河島の寶篋印塔」『史蹟名勝天然記念物』9—11
- 前田元重 1972 「箱根宝篋印塔と大工前大和権守大藏康氏」『金沢文庫紀要』第9号
- 三浦勝男・山田泰弘・岩崎春樹 1978 「鎌倉の宝篋印塔」鎌倉国宝館図録第22集, 鎌倉国宝館
- 三輪善之助 1923 「秩父石の宝篋印塔」『考古学雑誌』第14巻第7号
- 山崎邑吉・角張 毅 1981 「角張成阿弥陀仏研究—長門町仏岩の宝篋印塔」『須高』第13号
- 嘉津山清 1979 『石造美術県別主要文献目録』
- 渡辺龍瑞 1947 「下野国那須郡の宝篋印塔」『史迹と美術』第179号
- 柳田敏司 1978 『埼玉文化財点描』さきたま双書
- 山梨県教育委員会 1984 『秩父街道』山梨県歴史の道調査報告書第二集

第2表 宝篋印塔資料集（在銘塔）

番号	西暦	紀年銘	国別	所在地	所有者	石材	挿図・図版番号	文献
1	1296	永仁四年丙申五月四日	相模	神奈川県足柄下郡箱根町精神湖岸		安山岩	第2図1, 図版1, 1	日野1941, 前田1972, 野村1977 a, 三浦他1978
2	1304	嘉元二年大才申辰十二月廿日	〃	神奈川県足柄上郡大井町余見	石井醸造	安山岩	第2図2, 図版1, 2	川勝1960, 日野1976, 野村1977 a, 川勝1978
3	—	嘉元	〃	厚木市宿愛甲	円光寺	安山岩	第2図3, 図版1, 3	川勝1960, 日野1976, 野村1977 a
4	1308	徳治三年戊申六月廿三日	〃	小田原市酒匂2—41—37	大見寺	安山岩	第3図4, 図版2, 4	川勝1957, 野村1977 b
5	〃	徳治三季戊申七月日	〃	鎌倉市大町	安養院	安山岩	第3図5, 図版1, 5	野村1977 b, 三浦他1978, 川勝1978, 畑野1980
6	1309	延慶二年三月	〃	鎌倉市材木座	光明寺裏	安山岩		石田1969
7	1311	應長第一之曆南呂上旬	信濃	長野県小県郡大門町追分	仏岩	安山岩	第3図7, 図版2, 7	野村1977, 川勝1978, 山崎・角張1981
8	1313	正和発丑三月廿日	武蔵	横浜市金沢区六浦	上行寺	安山岩		赤星1937
9	1317	文保元年二月日	相模	鎌倉市極楽寺	坂間家	安山岩		川勝1957, 赤星1959, 三浦他1978, 川勝1978
10	〃	文保元	〃	〃	東方ヤグラ	安山岩		石田1969
11	1319	文保三年己未正月廿七日	〃	相模原市当麻	無量光寺	安山岩		野村1977 b
12	1320	元應二年七月一日	〃	〃	〃	安山岩		野村1977 b
13	1322	元亨二年	武蔵	川口市金山町	善光寺	安山岩	第3図13, 図版2, 13	日野1976, 野村1977 b
14	1323	元亨発亥	〃	東松山市岡	光福寺	安山岩	第4図14, 図版2, 14	川勝1957, 日野1976, 野村1977 a, 川勝1978
15	1329	元徳元年己巳九月十二日	〃	東京都板橋区赤塚町	松月院	安山岩		石田1969
16	1330	元徳二年庚午正月十四吉日	相模	鎌倉市建長寺	西来院前			赤星1937

関東型式宝篋印塔の研究

番号	西暦	紀年銘	国別	所在地	所有者	石材	挿図・図版番号	文献
17	1331	元徳三年三月	武蔵	鴻ノ巣市安竜寺	安竜寺	安山岩	第4図17	野村1977a
18	1332	元徳四年 ^{壬申} 五月五日	相模	神奈川県足柄下郡箱根町元箱根	興福院	安山岩	第4図18,図版3,18	川勝1974,日野1976,野村1977a,川勝1978
19	〃	正慶元年仲冬廿七日	〃	鎌倉市二階堂	覚園寺	安山岩	第5図	跡部1928,赤星1959,野村1977b,三浦他1978
20	〃	正慶元年壬申仲秋廿八日	〃	〃	〃	安山岩	第6図	日野1941,野村1977b,三浦他1978,跡部1928,赤星1959
21	1333	元弘三 ^{癸酉} 六月廿日	上総	富津市鶴岡	像法寺	安山岩		斎木1980
22	〃	正慶二年三月	相模	鎌倉市雪ノ下2丁目	鎌倉国宝館	安山岩		赤星1959,野村1977b,三浦他1978
23	〃	正慶二年	武蔵	横浜市港北区川和町	無量寺	—		日野1941
24	1334	建武元年大才甲戌六月廿一日	伊豆	静岡県賀茂郡下田町河内		—		石田1969,日野1970
25	1342	康永元年八月廿三日	上総	木更津市長須賀	福寿寺	—		斎木1980
26	1343	康永二年六月十五日	下野	日光市日光上野島2875-1	輪王寺	安山岩		富,中里1983
27	1344	康永三年 ^{甲申} 十月二日	相模	相模原市当麻	無量光寺	安山岩	第11図	野村1977b,川勝1978
28	1345	康永四年九月	下野	足利市小俣町	鶏足寺	安山岩	第7図28,図版3,28	野村1979
29	〃	康永四念	〃	足利市家富町	鏡阿寺			日野1941,川勝1957
30	〃	貞和元 ^{乙酉} 十二月九	下総	加須市大越	徳性寺	安山岩	第7図30,図版3,30	日野1976
31	1350	貞和六季 ^{庚寅} 二月日	甲斐	甲府市湯村3-17-2	塩沢寺	安山岩	第7図31,図版3,31	植松1978
32	1351	観応二年 ^{辛卯} 二月五日	下野	足利市山下町2-1336	達摩堂	安山岩	第7図32,図版4,32	川勝1957
33	1352	観応 ^{壬辰} 七月日	甲斐	山梨県山梨郡大和村木賊	棲雲寺	安山岩	第7図33,図版4,33	植松1978
34	〃	文和 ^{大才} 十二月日	武蔵	横浜市金沢区六浦	上行寺	安山岩	第7図34,図版4,34	赤星1959,野村1977b,三浦他1978
35	1353	文和癸巳歲	甲斐	山梨県東山梨郡大和村木賊	棲雲寺	花崗岩	第7図35,図版4,35	植松1978,小野1984
36	〃	文和二年八月日	下野	小山市網戸	稱名寺	安山岩	第7図36	日野1941
37	1355	文和 [〃] 年し未 [〃] 月五日	〃	〃	〃	安山岩	第7図37	日野1941
38	1356	文和五年 ^{丙申} 二月廿日	相模	鎌倉市梶原	国鉄大船場	安山岩	第8図38,図版5,38	赤星1959,野村1977b,三浦他1978,川勝1957
39	〃	文和五年三月三日	〃	鎌倉市大町	安養院			赤星1937
40	1358	延文三年	下野	小山市網戸	稱名寺	安山岩	第7図40	日野1941
41	1361	延文六年七月十三日	武蔵	東京都板橋区志村西台	京徳観音	安山岩	第8図41,図版5,41	日野1976,斎木1983b
42	〃	延文六年七月十三日	〃	〃	〃	〃	第8図42,図版5,42	日野1976,斎木1983b
43	〃	康安元年 ^{辛丑} 十月二日	相模	相模原市当麻	無量光寺	安山岩	第11図	野村1977b
44	1362	康安二季壬寅八月十日	甲斐	山梨県東山梨郡一宮町北野呂	長宗寺	—		植松1978
45	1363	貞治二癸卯十一月	〃	山梨市七日市場	鹿寿仏庵	—		植松1978
46	1366	貞治五年十二月廿七日	下野	小山市宮木町	須賀神社	安山岩	第8図46,図版5,46	日野1941,川勝1978
47	〃	貞治五	信濃	上田市中原	地藏堂	安山岩		
48	1367	貞治六年	〃	上田市真田町萩	実相院	安山岩	図版5,48	
49	1368	應安〇年	相模	相模原市当麻	無量光寺	安山岩		野村1977b
50	1369	應安己酉八月十八日	上野	沼田市上川田町	東光寺	安山岩	第8図50,図版6,50	群馬県教委1984

番号	西暦	紀 年 銘	国別	所 在 地	所有者	石 材	挿図・図版番号	文 献
51	〃	應安二年十一月日	下野	小山市	光明寺	安山岩	第8図51	
52	1370	應安第三 六月廿三日	〃	足利市山前	達摩堂	安山岩	第8図52, 図版6, 52	
53	1372	應安五季 ^{壬子} 四月五日	甲斐	山梨市七日市場	知足院	安山岩	第9図	植松1978, 山梨県教委1984
54	〃	應安第五 十二月三日	上総	市原市菊間	平親王山	安山岩	第8図54, 図版6, 54	齋木1980
55	1376	永和二年 ^{丙辰}	上野	群馬県利根郡水上町大字網子字林腰	網子	安山岩	第10図55, 図版6, 55	群馬県教委1984
56	1379	康暦元閏四月八日	〃	鎌倉市材木座	光明寺			赤星1937
57	〃	永和五年 ^{己未} 五月十三日	相模	鎌倉市極楽寺	西方寺跡	安山岩	第10図57	赤星1935, 野村1977 b, 三浦他1978, 川勝1978
58	1381	康暦三二月時正	〃	鎌倉市材木座	實相寺			赤星1937
59	〃	永徳元六月〇日	〃	〃	光明寺			〃
60	〃	永徳元年八月	〃	〃	来迎寺			〃
61	1382	永徳二 ^{壬戌} 十一月十三	〃	〃	九品寺			〃
62	1383	永徳発亥	下野	栃木県那須郡黒羽町	雲巖寺	安山岩		渡辺1947
63	1384	至徳元年七月日	〃	鎌倉市大船	成福寺			赤星1937
64	1386	至徳三 ^{丙午} 九月九日	相模	鎌倉市辨ヶ谷	浜口家	安山岩		赤星1959
65	1387	至徳二季 ^{己未} 三月十六日	〃	相模原市当麻	無量光寺	安山岩	第11図	野村1977 b
66	〃	至徳四年	下野	栃木県河内郡国本村寺内		—		日野1941
67	1388	嘉慶二二月十八日	相模	鎌倉市北鎌倉	北鎌倉駅裏墓地			赤星1937
68	1387 or 1388	嘉慶〇〇十月〇〇	上総	千葉県長生郡長南町豊原	妙善寺	安山岩		齋木1980
69	1391	明徳二年月日	相模	横浜市磯子区	稱名寺			赤星1937
70	1392	明徳三 ^{丙午} 二月廿四日	〃	鎌倉市浄明寺	浄妙寺	安山岩	第10図70, 図版7, 70	日野1941, 赤星1959, 野村1977 b, 三浦他1978
71	〃	明徳三年 ^{壬午} 五月十七日	〃	鎌倉市大船	岡本			赤星1937
72	〃	明徳 ^{壬午} 六月十六日	〃	〃 二階堂	瑞泉寺			〃
73	〃	明徳三年八月 日	〃	〃 浄明寺	報國寺			〃
74	1393	明徳四年二月廿五日	武蔵	横浜市磯子区	千光院			〃
75	〃	明徳 ^二 五月廿三日	相模	鎌倉市大船	光照寺			〃
76	〃	明徳発西六月廿三日	〃	〃	成福寺			〃
77	〃	明徳二年 ^{癸酉} 十月廿六日	下総	市川市国分町	下総国分寺	安山岩		齋木1980
78	〃	明徳第四 ^{癸酉} 霜月三日	相模	鎌倉市由比ヶ浜	由比ヶ浜	安山岩	図版7, 78	川勝1957, 赤星1959, 野村1977 b, 三浦他1978
79	1394	應永元年七月十一日	〃	〃 大船	圓覚寺			赤星1937
80	〃	應永元	下野	足利市山前	長松寺	安山岩		日野1970
81	〃	應永改元十一月十八日	〃	栃木県佐久山町福原	永興寺	安山岩		渡辺1947
82	1395	明徳六年	相模	鎌倉市浄八寺	浄妙寺			赤星1937
83	〃	應永二年三月	〃	〃 材木座	向福寺			〃
84	〃	應永二年六月念六日	〃	〃 浄明寺	釈迦堂ヶ谷			〃

関東型式宝篋印塔の研究

番号	西暦	紀年銘	国別	所在地	所有者	石材	挿図・図版番号	文献
85	〃	應永二七月十	〃	〃 材木座	辨ヶ谷			〃
86	〃	應永二乙亥七月十七日	武蔵	横浜市金沢区六浦	上行寺			〃
87	〃	應永二年十月十六日	相模	相模原市当麻	無量光寺	安山岩	第10図87	野村1977 b
88	1396	應永丙子三月廿八日	〃	鎌倉市十二所	東泉水			赤星1937
89	1397	應永二年四月廿一日	上総	千葉県長生郡長南町豊原	妙善寺	—		斎木1980
90	〃	應永二年四月廿四日	下野	群馬県群馬郡群馬町棟高	大沢家墓地			石田1969
91	〃	應永二八月日	相模	鎌倉市二階堂	杉本寺			赤星1937
92	〃	應永四丁亥八月六日	武蔵	横浜市金沢区六浦	上行寺			〃
93	〃	應永四 十月七日	相模	鎌倉市材木座	来迎寺			〃
94	〃	應永四 十二月	〃	〃 十二所	東泉水			〃
95	1398	應永五年□月日	上総	市原市中野	光徳寺	安山岩		斎木1980
96	〃	應永五年十一月日	下総	市川市国分町	下総国分寺	安山岩		斎木1980
97	1399	應永六年正月	〃	逗子市桜山	矢部家			赤星1937
98	〃	應永六二月十六日	武蔵	横浜市磯子区六浦荘	塔島			〃
99	〃	應永六年四月八日	相模	鎌倉市材木座	来迎寺			〃
100	〃	應永六八月廿二日	武蔵	横浜市磯子区六浦荘	自性院			〃
101	〃	應永六年己卯八月廿六日	〃	〃	光伝寺			赤星1937, 赤星1967
102	〃	應永六十一月廿五日	相模	鎌倉市浄明寺	釈迦堂ガ谷			赤星1937
103	〃	應永六年	武蔵	品川区北品川	法禅寺	安山岩		日野1941, 斎木1983 b
104	1400	應永七年正月十四日	相模	鎌倉市二階堂	覚園寺墓地			赤星1937, 赤星1967
105	〃	應永七年二月廿一日	〃	〃	報国寺			赤星, 1937
106	〃	應永七年七月□日	〃	相模原市当麻	無量光寺	安山岩		野村1977 b
107	〃	應永七年十一月八日	〃	鎌倉市材木座	向福寺			赤星1937
108	1401	應永八年辛巳二月三日	上野	群馬県甘楽郡甘楽町金井	宝勝寺	安山岩	第10図108, 図版7, 108	川勝1978
109	〃	應永八 二月九日	相模	鎌倉市辨ヶ谷	友野家	安山岩		赤星1937
110	〃	應永八年六月日	〃	〃 材木座	向福寺			〃
111	〃	應永八年九月二	〃	〃	〃			〃
112	1403	應永十年三月二日	〃	逗子市池子	東昌寺	安山岩		赤星1971
113	1404	應永十一八月十八日	〃	鎌倉市大船	建長寺			赤星1937
114	〃	應永十一年	武蔵	深谷市国济寺	国济寺	安山岩	図版7, 114	野村1977 a
115	1405	應永十二年二月十二	相模	鎌倉市二階堂	百八やぐら			赤星1937
116	〃	應永十二年七月八	〃	〃 十二所	稲荷小路			〃
117	〃	應永十二稔乙酉八月二十五日	〃	鎌倉市深沢	北野神社	安山岩	第10図117, 図版8, 117	赤星1959, 野村1977 b, 三浦他1978
118	〃	應永十二季九月□日	安房	千葉県安房郡天津小湊町清澄	清澄寺	蛇紋岩		斎木1983 a

番号	西暦	紀年銘	国別	所在地	所有者	石材	挿図・図版番号	文献
119	〃	應永十二年 ^{乙酉} 霜月十八日	下総	千葉県香取郡大栄町吉岡	大慈恩寺	—		齋木1980
120	1406	應永十三二月十四日	相模	鎌倉市二階堂	杉本寺			赤星1937
121	1407	應永十二二月十四日	〃	〃	〃			〃
122	〃	應永十四年 ^{二晦} 三月二日	安房	千葉県安房郡天津小湊町清澄	清澄寺	蛇紋岩	第10図122, 図版8, 122	齋木1980
123	〃	應永十三六月二日	相模	鎌倉市辨ヶ谷	友野家裏			赤星1937
124	〃	應永十三八月日	〃	〃 二階堂	杉本寺			〃
125	1408	應永十五 ^{戊子} 六月二日	〃	〃 大倉	〃	—		〃
126	1409	應永十六二月十一日	武蔵	横須賀市	妙真寺			〃
127	〃	應永十六六月日	相模	鎌倉市小町	妙隆寺			〃
128	1410	應永十七二月八日	〃	〃 材木座	光明寺			〃
129	〃	應永十七七月十日	〃	〃 二階堂	百八やぐら			〃
130	〃	應永十七十月七日	〃	〃	報國寺			〃
131	〃	應永十七年十二月三日	〃	〃 十二所	稻荷小路			〃
132	〃	應永十七年	〃	〃 扇ヶ谷	寿福寺			〃
133	1411	應永十八三月日	〃	鎌倉市大町	別願寺			赤星1937, 赤星1967
134	〃	應永十八年四月六日	〃	〃 西御門	来迎寺			赤星1937
135	〃	應永十八年六月廿七日	下総	八千代市村上	正覚寺	安山岩		齋木1980
136	1413	應永廿年九月廿	相模	鎌倉市材木座	九品寺			赤星1937
137	1414	應永廿一年甲午三月六日	〃	〃 十二所	稻荷小路			〃
138	〃	應永廿一年四月廿五日	〃	〃 材木座	来迎寺			赤星1937, 赤星1967
139	〃	應永廿一年六月六日	〃	〃 山之内	圓覚寺			赤星1937
140	〃	應永廿 ^三 年八月十五日	〃	相模原市当麻	無量光寺	安山岩	第11図	野村1977 b
141	1415	應永廿二月七日	〃	鎌倉市雪之下	八方堂			赤星1937
142	〃	應永二十二年十一月日	上総	千葉県長生郡長柄町長柄山	眼蔵寺	安山岩		齋木1980
143	〃	應永廿二年	下野	足利市西宮町	長林寺	安山岩		日野1941
144	1416	應永廿三二月三日	相模	鎌倉市浄明寺	浄妙寺			赤星1937
145	〃	應永廿三三月十六日	〃	〃 二階堂	杉本寺			〃
146	〃	應永丙申六月五日	〃	鎌倉市	富陽庵	安山岩		赤星1959, 三浦他1978
147	〃	應永廿三六月	〃	鎌倉市二階堂	鎌倉宮			赤星1937
148	〃	應永廿三七月日	〃	〃 小町	妙隆寺			赤星1937, 赤星1967
149	1417	應永廿三年八月廿五日	〃	〃 十二所	光触寺路傍			赤星1937
150	1418	應永廿五二月日	武蔵	横浜市磯子区六浦荘	禪林寺			赤星1937, 赤星1967
151	〃	應永廿五八月廿一日	相模	鎌倉市扇ヶ谷	観音山			赤星1937, 赤星1967
152	1419	應永廿六十月八日	〃	〃 浄明寺	報國寺			赤星1937

関東型式宝篋印塔の研究

番号	西暦	紀年銘	国別	所在地	所有者	石材	挿図・図版番号	文献
153	1420	應永廿七七一	〃	〃 材木座	實相寺			〃
154	〃	應永二十七年	武蔵	熊谷市上之	竜淵寺	安山岩	第10図154	
155	1421	應永廿八年二月十七日	相模	鎌倉市深沢鎌倉山	菅原家			赤星1937
156	〃	應永廿八六月三日	〃	〃 浄明寺	報國寺			〃
157	〃	應永廿八六月五日	〃	〃 〃	〃			〃
158	〃	應永廿八年〇月六日	〃	〃 大町	安養院			〃
159	1422	應永廿九年三月六日	〃	〃 扇ヶ谷	観音山			〃
160	〃	應永廿九年九月廿日	〃	〃 長谷	三條公邸			〃
161	1424	應永卅一年三月七日	〃	〃 十二所	光触寺			〃
162	〃	應永卅一年三月十五日	〃	〃 小町	妙隆寺			〃
163	〃	應永卅一八月十日	〃	〃 扇ヶ谷	華光院 やぐら			〃
164	1425	應永卅二十九	〃	〃 材木座	九品寺			〃
165	1426	應永三十三年	下総	千葉県印旛郡富里村中沢	昌福寺	—		齋木1980
166	〃	應永三十三年十月四日	〃	千葉県印旛郡白井町根七次	地藏堂跡	—		齋木1980
167	1427	応永卅四 七月十六日	安房	千葉県安房郡三芳村上滝田	小沢さわ	—		齋木1983
168	1428	正長元年九月晦日	〃	鎌倉市極楽寺	西方寺跡			赤星1937
169	1431	應永卅八年七月十五日	〃	神奈川県中郡高部屋	洞昌院			赤星1937
170	〃	永享三年 ^{辛亥} 十月十六日	〃	神奈川県足柄下郡箱根町元箱根	賽河原			〃
171	1432	永享 ^二 五月日	〃	鎌倉市大町	安養院			〃
172	〃	永享四年九月二十九日	下総	千葉県香取郡多古町島	正覚寺	—		齋木1980
173	1433	永享五年八月十三日	相模	神奈川県海老名市	惣持院裏			赤星1937
174	1434	永享六六月廿四	〃	鎌倉市二階堂	鎌倉宮			〃
175	1435	永享七 ^{乙卯} 三十九	武蔵	東京都江東区亀戸6丁目	自性院	緑沢片岩	第10図175, 図版8, 175	三輪1923, 日野1941, 齋木1983b
176	1436	永享八年八月〇日	相模	鎌倉市二階堂	やぐら内	—		赤星1959
177	〃	永享八年八月	〃	〃 〃	亀ヶ淵			赤星1937
178	1438	永享十年一月廿九日	〃	〃 長谷		—		赤星1967
179	1439	永享十一二月廿九日	〃	〃 〃	三條公邸			赤星1937
180	〃	永享十一十月廿九日	〃	〃 雪之下	人丸塚			〃
181	1440	永享十二年七月十八日	〃	〃 材木座	進藤亭			〃
182	1445	文安二年	武蔵	横須賀市金谷	大明寺			〃
183	1447	文安四年丁卯十二月二日	相模	逗子市池子	東昌寺	安山岩		赤星1971
184	1448	文安五年十一月日	〃	神奈川県足柄上郡松田町宮脇	門魔堂前			赤星1937
185	1449	文安六年二月廿二日	〃	鎌倉市十二所	光触寺			〃
186	1451	寶徳三六月十九日	〃	〃 葛原岡	道智塚			〃

番号	西暦	紀年銘	国別	所在地	所有者	石材	挿図・図版番号	文献
187	1452	宝徳四年四月十二	〃	〃 海蔵寺裏谷	海蔵寺	一		赤星1967
188	〃	寶徳二年八月廿〇日	〃	〃 長谷	三條公邸			赤星1937
189	1457	康正三年五月十五日	武蔵	横浜市磯子区六浦荘	光伝寺			〃
190	1458	長禄二年十一月廿五日	安房	鴨川市和泉	長泉寺	一		齋木1983 a
191	1468	應仁二年四月一日	武蔵	横浜市磯子区六浦荘	稱名寺			赤星1937
192	1472	文明六年三月一日	下野	足利市西宮町	長林寺	安山岩	図版 8, 192	
193	1489	長亨三季 _{己酉}	武蔵	伊勢崎市富塚町	円福寺	安山岩		群馬県教委1984
194	1491	延徳三年 _{己酉} 月十七日	安房	千葉県安房郡丸山町岩糸	堂	一		齋木1983 a
195	1508	永正五年 _{戊辰} 六月十七日	武蔵	東京都葛飾区青戸	葛西城址	安山岩		加藤他1975
196	1512	永正九年八月十六日	相模	神奈川県中郡大磯町	三井邸裏山			赤星1937
197	1514	永年十一年	信濃	長野県北佐久郡望月町望月	城光院	安山岩		
198	1522	天文廿一年四月日	相模	小田原市酒匂	大見寺	安山岩	第12図198, 図版 9, 198	
199	1530	享禄第三 _{庚子} 曆應鐘十四日	下総	銚子市馬場町	円福寺	砂岩		篠崎1941, 齋木1980
200	1535	天文四年	武蔵	埼玉県大里郡寄居町藤田	正竜寺	〃	図版 9, 200	柳田1978
201	1546	天文十五季 _{丙午} 月廿四日	下総	佐倉市海隣寺町	海隣寺	安山岩		齋木1980
202	1547	天文十六年今日	上総	市原市今富	円満寺	安山岩	第12図202	日野1941
203	1550	天文十九年 _{庚戌} 三月廿四日	下野	足利市本城1丁目	心通院	安山岩		
204	1555	天文二四年	武蔵	埼玉県大里郡寄居町藤田	正竜寺	砂岩		柳田1978
205	1556	天文廿五年 _{丙辰} 十月廿八日	安房	館山市畑	瑞龍院	蛇紋岩		齋木1980
206	1557	弘治三年 _{丁巳} 八月七日	下総	佐倉市海隣寺町	海隣寺	砂岩		〃
207	1560	永禄三天康申二月日	安房	千葉県安房郡三芳村府中	宝珠院	一		〃
208	1562	永禄五年	武蔵	埼玉県大里郡寄居町藤田	正竜寺	砂岩	図版 9, 208	柳田1978
209	1564	永禄七年 _{甲子} 正月八日	安房	館山市船形	西行寺	一		齋木1983 a
210	1568	永禄十一年	武蔵	岩槻市本町	芳林寺	凝灰岩	第12図210, 図版 9, 210	日野1941
211	1569	永禄十二年十月十五日	下野	足利市本城1丁目	心通院	安山岩		
212	1571	元龜二辛未年十一月廿一日	相模	神奈川県足柄上郡	善栄寺	一		赤星1937
213	1572	元龜三年壬申拾月十八日	下総	銚子市馬場町	円福寺	砂岩		篠崎1941, 齋木1980
214	1574	天正三 _{庚戌} 年今日	〃	佐倉市大佐倉	勝胤寺	〃		齋木1980
215	1576	天正四年 _{丙子} 六月十日	〃	銚子市松本町	光嚴寺	〃		〃
216	〃	天正四年 _{丙子} 月〇日	〃	銚子市馬場町	円福寺	〃		篠崎1941, 齋木1980
217	〃	天正四年	下野	栃木県那須郡黒羽町	乾徳寺	凝灰岩		渡辺1947
218	1578	天正六年三月日	下総	銚子市馬場町	円福寺	砂岩		篠崎1941, 齋木1980
219	〃	天正六年九月十二日	下野	足利市本城1丁目	心通院	安山岩		
220	1579	天正七年五月四日	下総	佐倉市海隣寺町	海隣寺	砂岩		齋木1980

関東型式宝篋印塔の研究

番号	西暦	紀年銘	国別	所在地	所有者	石材	挿図・図版番号	文献
221	1582	天正十年十一月廿四日	〃	〃	〃	〃		〃
222	1584	天正十二年三月五日	上総	富津市富津	長秀寺	一		〃
223	1585	天正十三年五月七日	下総	佐倉市海隣寺町	海隣寺	砂岩		〃
224	〃	天正十三年六月十八日	〃	〃	〃	〃		〃
225	〃	天正十三年七月七日	〃	八日市場市米倉	西光寺	〃		〃
226	1586	天正十四年四月廿六日	〃	銚子市馬場町	円福寺	〃		〃
227	1589	天正十七年七月吉日	〃	佐倉市海隣寺町	海隣寺	〃		〃
228	〃	天正十七年八月廿〇日	〃	千葉県香取郡干潟町鏡木	長泉寺	一		〃
229	1590	天正十八年二月廿一日	上総	市原市石塚	墓地	一		〃
230	〃	天正十八年	下総	佐倉市海隣寺町	海隣寺	砂岩		〃
231	1592	天正二十年四月廿八日	〃	佐原市牧野	観福寺	〃		〃
232	1593	天正廿一年三月廿六日	〃	八日市場市米倉	西光寺	〃		〃
233	1594	文禄三年	下野	栃木県那須郡黒羽町	乾徳寺	安山岩		渡辺1947
234	1595	文禄四年四月二日	〃	〃	〃	〃		〃
235	1596	文禄五年二月吉日	〃	佐原市牧野	観福寺	砂岩		齋木1980

第3表 宝篋印塔資料集（無銘塔）

番号	国別	所在地	所有者	石材	挿図番号	時代	備考
1	常陸	茨城県筑波郡筑波町宝篋山		花崗岩	第13図1、図版10、1	鎌倉中期(弘長)	田岡1972
2	下野	宇都宮市千波町	清巖寺	安山岩	第13図2、図版10、2	鎌倉後期	
3	〃	〃	〃	〃	第13図3、図版10、3	南北朝	
4	相模	鎌倉市扇が谷	浄光寺	〃	第13図4、図版10、4	南北朝前期	三浦・山田・岩崎1978
5	武蔵	東京都葛飾区東堀切	普賢寺	〃	第13図5、図版11、1	鎌倉後期	齋木1983 b
6	〃	〃	〃	〃	第13図6	南北朝中期	齋木1983 b
7	下野	栃木県上都賀郡粟野町北半田	医王寺	〃	第14図1		富、中里1983
8	〃	〃	〃	〃	第14図2		富、中里1983
9	〃	栃木県安蘇郡葛生町松井町	願成寺	〃	第14図3、図版11.2	南北朝前期	日野1941、重層宝篋印塔？
10	常陸	龍が崎市河原代	安楽寺	花崗岩	第14図4、図版11.3	室町中期以降	寺崎1971、千々和他1984、鈴木1984
11	岩代	福島県耶麻郡磐梯町	恵日寺	安山岩	第14図5、図版11.4	室町中期以降	石田1969
12	〃	〃	〃	〃	第14図6	室町中期以降	石田1969
13	下総	船橋市本町	西福寺	〃		鎌倉後期	齋木1980、齋木1983 a

(千葉県教育庁文化課)